

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

2025 66
graph magazine vol.

Unser
HERR
lebt

vol. 66 定価100円(税込み)



Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

- 4 イエスの証し(3) ゴットホルド・ベック
- 20 イエスは預言された救い主 川鍋 一吉

7人の証し

- 29 全ての事が益とされる 中山 晋一
- 38 まことの神様に会おうまで 松田 節子
- 49 ^{くらやみ}暗闇から聖霊の望みの中へ 矢野 一美
- 56 いつも共にいてくださるイエス様 富田 幸子
- 64 主に導かれて、日々祈りつつ 宮路 清正
- 74 みことばのとおりに 詩篇119篇 丸茂 栄里子
- 82 イエス・キリストに愛されて四十年 大塚 二郎

イエス様の証し(3)

ゴットホルド・ベック

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。
(ヨハネ 10・11)

それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。
(ヨハネ 10・15)

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。
(ヨハネ 10・17)

前回、前々回に引き続いて、「主イエス様の証し」という題名で、一緒に考えてみたいと思います。

「自身についての証し」

イエス様は「わたしは、良い羊飼である。雇い人ではない。本物であり、偽者ではない」と仰いました。次に「わたしは、門そのものである。道そのものであり、単なる道しるべではない。嘘つきでもないし、盗人でもない」。そして「わたしは、神である父の息子である。わたしは、神の冒涇者ではない」とイエス様は、はっきり証しされたのです。

これを聞いた当時の人々の多くは喜び、旧約聖書で約束された救い主はこの方なのではないかと思いましたが、それでも、自分の事ばかり考えていた人々、つまり当時の宗教指導者たちは、イエス様の証しを聞く耳を持っていませんでした。

イエス様の言明は、確かに驚くべきものです。「わたしが良い牧者であり、ただわたしのもとにのみ、本当の満足があります。わたしだけが、唯一の天に行く道

イエス様の証し(3)

イエス様の大切な告白とは、冒頭に掲げたヨハネ10章11節「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」です。良い牧者であるイエス様の捨てられたいのちこそが、考えられないほど主が私たちを愛されている証拠なのではないでしょうか。

イエス様のなさった三種類の証しがどのようなものかと言うと、第一に「ご自身についての証し」、第二に「羊たちについての証し」、第三に「父なる神についての証し」です。第一と第二についてはすでに見てきましたが、少しだけ振り返ってみたいと思います。

です。わたしを通らなければ、誰も父のみもとに行くことができません。」そして、「わたしだけが、父と一つになっている者です。わたしは、永遠の神です。」と仰いました。では、このイエス様の言明がどうして真理であるかと分かるのでしょうか。イエス様が復活された事実こそが、その証拠です。主なるイエス様はよみがえられました。それも二、三人の弟子たちだけに現われたのではなく、五百人以上(1コリント15・6)の人々に現われ、四十日にわたって、彼らは復活された主に出会ったのです。

そしてまた、今日、イエス様に頼り、イエス様に信頼して赦されたという確信を持つようになったひとり一人が、イエス様がなさった言明が真理であることの証明となります。彼らは次のように言える幸いな人々です。「私は、イエス様が良い牧者であることを知っています。それだけではありません。この牧者なるイエス様は、私のものです。その主に私は信頼し、その主に従いたいのです」。さらに、「私はイエス様が、唯一の門であ

ることをも知っています。イエス様お一人だけが、あらゆる問題の解決です。イエス様のもとに来て後悔した人は一人もいません。イエス様が聖書に約束された救い主であることも知っています。イエス様は永遠の神です。イエス様は、私の罪を赦してください、私に永遠のいのちを与えてくださったからです」と。

二、羊たちについての証し

そしてイエス様は、ご自分についてだけではなく、ご自身の羊たちについても語っておられます。「彼ら(羊たち)はわたしの声を聞き、その声を知っていて、わたしの声を聞き分けます」と言われました。羊は確かに愚かな動物ですが、羊飼いの声をちゃんと聞き分けることができるのです。

以前、南ドイツのカールスルーエというところで羊泥棒に遭った人の話を聞きました。その人は彼の全財産である五百匹すべてを盗まれたのです。一週間後、そ

のです。

そもそも羊というものは、愚かな動物です。一匹が川の流れに入って溺れてしまうと、その羊の後に続いている群れ全体も、同じことを行ない、同じ運命に遭います。羊飼いのない羊は、失われ、どうすることもできない状態におかれて、守ってくれる者もなく、完全に助けのない哀れな存在となります。そして生きておられる神は、人間をそのような助けのない羊にたとえています。

旧約聖書の中で最も大切な書の一つは、おそらくイザヤ書ではないでしょうか。53章6節にこう書いてあります。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。(イザヤ 53・6)

これが良き知らせ、「福音」そのものです。人間は、自分がなぜ生まれたのか、人生の意味は何か、死んだ後ど

イエス様の証し(3)

ここからかなり離れたケルンという町で、約一万匹の盗まれた羊が外国に運ばれる前にみつかりました。警察から連絡があつて、その人の盗まれた五百匹がそこにいるかもしれないから行って確かめるようにと。羊は皆同じ顔をしているから自分の羊がみつかるかどうかわかりませんが、その人は行って、自分の声で羊を呼んだのです。すると向こうから一匹、あちらから一匹、と出てきて、数えると全部で五百匹でした。私たちには考えられないことです。羊はふつう愚かなものだと考えられています。羊はそれ程愚かではなく、羊飼いの声は聞くことができるのです。

またイエス様は「わたしは、彼らによってよく知られています。彼らは、わたしについて来ます」と仰いました。キリスト教に入るのでもなく、教会に行くのでもない。「わたしについて来ます」と。大切なことは、人間の思っていること、考えていることではなく、「神のみことばである聖書は何といっているか」それだけな

うなるのかということを知りません。人間は、愚かな羊と同じようなものです。羊はどこまでも羊であり、そしてまた羊に留まるのです。急に猫になったり、犬になったりすることはあり得ません。人間は結局、どこまでも人間であり、守りなく助けのない存在にすぎません。その状態に留まるのです。けれども大切なのは、私たち人間よりも、イエス様です。イエス様はどうしようもない人間のことを考えておられ、心配しててくださいます。イエス様によって愛されていない人間は一人もいません。

昨夜遅く、始めてではないのですがある男性から電話がかかって来ました。彼が電話口で、「私は15分ごとに同じ気持ちになる。私はダメだ。私はダメだ。私はダメだ」。それで私は「それじゃあ、あなたは15秒ごとにこう考えればどう? 私は愛されている。私は愛されている。私は愛されている」と思っ感謝したらいいじゃないの」と言いました。彼は「ああ。そうか」。それで電話が終わりました。彼はただ寂しくてどうしたらいいのか

分からなかったただけなのです。イエス様は「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ10・11)と証しされました。

三、父についての証し

ここからはイエス様のなさった第三の証し「父についての証し」を考えてみましょう。ヨハネの福音書だけでも、「父」ということは八十数回出てきます。「神」ではなく「父」ということです。イエス様は、三種類に分けて「父」について語っておられます。「わたしは、父を知っている」。「わたしの父は、わたしを愛している」。そして「わたしの父は、すべてにまさって偉大である」と証しされました。

1. わたしは父を知っている

それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を

知っているのと同様です。またわたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。
(ヨハネ10・15)

聖書は、神の定義をすることは何もしていませんが、主である神の本質とイエス様の性質については、多くの説明をしています。主である神は限りない力をもっておられ、私たちには想像すらできません。主である神の知恵は、私たち人間の頭では考えられないものであり完全なものです。主である神は百パーセント信頼でき、また信頼に値するお方です。主である神は、徹頭徹尾、神聖なお方です。この主である神は、自然の中にご自身を現わしておられ、また預言者たちに与えられたみことばを通して、ご自身を明らかにしておられます。しかしとりわけ、「御子」イエス様を通して、ご自身を啓示しておられます。ただお一人のまことの神が存在しておられます。そして、聖書はその他の多くの神々を偶像、あるいは悪霊と呼んでいます。

人間は、誰でもいわゆる神意識を持っています。人間

言われました。

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。
(ヨハネ10・17)

このことを言い換えるなら、「わたしは、父の主要関心事です」と表現できます。「父の愛は、わたしに集中されています。わたしは、父の喜びです」とイエス様は言われたのです。今まで誰一人、そのような言明を行なった者はいませんでした。当時の宗教指導者や聖書学者たちは、それを聞いて怒り、彼は悪霊につかれている、気が狂っていると言ったのです。

彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」
(ヨハネ10・20)

2. 父はわたしを愛している

イエス様は「わたしの父は、わたしを愛している」と

イエス様の証し(3)

イエス様を通して全宇宙が創造され、そしてまたイエス様のために全宇宙が造られたのです。ということは、いかにイエス様が、中心的存在として立つておられるかを私たちに示しているのではないでしょうか。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
(コロサイ 1・15、16)

けれども、イエス様は次のように語っておられます。「わたしが…自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます」。十字架の上で全人類のために贖いの死を遂げてくださり、そのために呪われ、罪そのものとなってくださるという、イエス様の覚悟は、父で

ある神の愛がイエス様に注がれる原因となっているのです。

——この御子イエス様への父の愛は、イエス様を通して罪人である私たちに注がれることになりました。「私は愛されており、私は心配してもらっている」ということを人間が知った時、その人は非常に元氣になり、不安は消え去り、喜びに満ち溢れます。そしてこれこそ喜びの訪れ、すなわち福音そのものです。

ですから、誰でも次のことを知ることが許されています。「私は主に愛されている。たとえ人間には無視され、のけ者にされているとしても、生きている真の神によって愛されている」と、そしてイエス様を自分の生涯の中に受け入れた者は、生きておられる神が、ただ単に「私の神」であるだけではなく、主イエス様を通して「私の父」ともなってくださいたということを知ることができます。このすばらしい恵みについて考えると、もう疲れもありませんし、感謝するばかりです。そのために永遠の世界に入ってから、いつまでも礼拝せざるを得

なく なります。どうして愛されたのか、いくら考えてもわかりません。私たちも愛されています。けれども、それは私たちが主に愛されるに値する者だからなのではありません。イエス様のゆえにこそ、私たちは愛されているのです。

3. わたしの父はすべてにまさって偉大である

さらに第三の言明は、「わたしの父は、すべてにまさって偉大です」という大切な証しです。この父の偉大さを七つの点に分けて短く考えてみましょう。

第一に、「父は罪や債務より偉大である」ということです。罪と債務は、人間の上に非常に重くのしかかり、あらゆる安らぎを奪い取ってしまうことがあります。主は次のように言っておられます。旧約聖書の福音書といわれるイザヤ書を見ると、このように書かれています。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」
(イザヤ 1・18)

すばらしい主の呼びかけであり、約束です。父——主である神——が人間の罪の債務よりも偉大であるということです。

第二に、父は人間のあらゆるたくらみよりも、はるかにそれを越えた大いなるお方です。人間は、ある程度の力を持つことができるでしょうが、父はそれと較べることができないはるかに偉大なお方です。これを旧約聖書のヨセフも経験しました。

ヨセフはその父親であるヤコブにどの兄弟よりも愛されていました。さらに彼が見せられた夢のせいで、兄たちはヨセフを憎み、妬んで、殺そうとしました。けれども、兄たちの一人がそれに反対し、そこにやって来た

イシュマエル人の隊商に売り、彼らによってエジプトのファラオに仕える家来に売られました。その時のことが使徒の働き7章に書いてあります。

族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかし、神は彼とともにおられ、あらゆる患難から彼を救い出し、エジプト王パロの前で、恵みと知恵をお与えになったので、パロは彼をエジプトと王の家全体を治める大臣に任じました。

(使徒 7・9、10)

ここに「しかし、神は彼とともにおられ」とあり、創世記にも同じことが記されています。

彼の主人は、主が彼(ヨセフ)とともにおられ、主が彼のことすべてを成功させてくださるのを見たと。

(創世記 39・3)

フを奴隷として売った兄弟たちが目の前に現われた時、彼は次のように言うことができたのです。

あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。

(創世記 50・20)

人間は悪を計りますが、主である神は導かれます。出エジプト記33章にも書かれています。

すると主は仰せられた。『わたし自身がいっしょに行つて、あなたを休ませよう。』 (出エジプト 33・14)

まことにすばらしく、勇気を与えてくれる主のことばです。わたし自身がいっしょに行くと、主は言われます。

イエス様の証し(3)

監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである。 (創世記 39・23)

「主が彼とともにおられ」と書かれています。牢獄の中でもヨセフは、不平、不満を言わず、主の御手によって守られた者として、安心して希望をもって生活することができたのです。

救いとは、一時的な問題の解決ではありません。永遠のものです。言い換えれば「主が共におられる」ということです。ヨセフの救いが何であつたかと言え、一言で「主との交わり」です。ヨセフは、主に信頼しており、主の導きは完全で間違いがなく、最善であると確信していたのです。ヨセフは、すべてを主の御手から受け取ったのです。ですから、自分を陥れた者への復讐の気持ちもありませんでした。裁き主は決して自分ではない、主ご自身であると認識していたのです。後年、ヨセ

そして第三に、父はすべての病にまさるお方です。何十年か前に、私はスイスで一人のご婦人と知り合いになりました。彼女は神経に異常をきたす難病にかかり、身体が動かさなくなっていました。恐ろしい想像を超えた病でした。彼女の夫は彼女を捨てて、他の女性と一緒に生活するようになっていました。けれども、彼女はイエス様を心から喜んでいたので、「イエス様を知ることができて私は嬉しいです。イエス様はすべてを支配しておられます。ですから、この今の導きも理解できませんけど、間違いなく完全です」と言うことができたのです。

第四に、父は、日常生活で起こるどんな問題にもまさつたお方です。日々の生活は、一人の人間の上に何と神経破壊的に、また抑圧的にのしかかっているのでしょうか。けれども、父は私たちを力づけ、活力を与え、勇気づけることがお出来になります。ヘブル人への手紙12章を読めば、「なぜ?」「どうして?」という愚かな質

問に対する答えが出て来るのではないのでしょうか。

そして、あなたがたに向かつて子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者(嫌いな者ではない)を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」
(ヘブル 12・6)

主の命令は「主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない」とあります。私たちは、いったいどうして弱り果てて、精神的に疲れてしまうのでしょうか。私たちは主の懲らしめの証拠について、また懲らしめについて考えていないのではないのでしょうか。懲らしめられることは、何を証明しているのでしょうか。それは主に愛されていることです。主は愛しておられる者だけ、心配している者だけを懲らしめられる

ださるのであり、そしてすべては、間違いなく益となるのです。私たちは、主の栄光にあずかる者となり、いつまでも栄光の主と共に過ごすようになります。

第五に、父はあらゆる試みや攻撃にまさったお方です。悪魔は、さまざまな手段を使って私たちを使い物にならなくしようと思っています。しかし、主により頼む者は、ヨセフと同じような態度をとることのできる力を得るようになります。初代教会の兄弟姉妹も、いろいろな辛いことを経験しました。主に信頼すれば、物事がすべてうまく行くというのではありません。使徒パウロは、自分の苦しみについて多くは書いていませんが、コリント人への第2の手紙の中で、ありのままを隠すことなく証しています。非常にすばらしい証しです。

兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえ

イエス様の証し(3)

のです。ですから主に懲らしめられることは、のけ者にされること、罰せられることではなくて、大いに愛されている事実の証明そのものです。私たちはいったいどうして心配し疲れてしまうのかと言うと、懲らしめられていることこそが、主に愛されている証拠であることを忘れているからです。懲らしめておられる方を忘れてしまうからです。他人のせいだ、環境のせいだと思えば、間違いなく不幸になり主に用いられなくなります。懲らしめを与えるお方とは、私たちを心から愛してくださる方、主である神ご自身です。血潮を流して自分をお捧げになった、そのいのちを捨てることを通して計り知れない愛を明らかにくださったイエス様こそ、導いてくださり、懲らしめていくくださるお方です。私たちはなぜ、すぐにみじめな気持ちになったり、あきらめたり、がっかりしたりするのでしょうか。懲らしめの目的を忘れているからではないのでしょうか。

主である神は、人間一人ひとりの最善だけを考えておられる方です。すべての背後に主はおられ導いてく

も危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これはもはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

(2コリント 1・8、9)

ある時パウロは、もう自分は終わりだと思いましたが、祈った結果、急に悟ったのです。「これはもはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるため」だと。パウロはまだそうはなっていない自分気づいたのです。自分は主である神に徹底的により頼む者となったと思っていたのが、実際はまだそうなっていないかったのです。そして次の証しとなる経験をさせられました。

ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

(2コリント 1・10)

本当にすばらしい証しです。4章にも初代教会の人々が前向きに生活することができたのはどうしてかが記されています。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4・16～18)

父とはどのようなお方でしょうか。イエス様の第六の答えは、「父は死よりも偉大なお方である」というものです。父である神は、死の彼方におられ、あらゆる死の恐怖を取り去ってくださいます。イエス様を通して

神のなさることを妨げることができません。」

(使徒 11・17)

この主である神について、また次のように書かれています。

あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。(イザヤ 40・28～31)

父である神は、奇跡を行なうお方です。自分の苦しみとすべての重荷を父である神の御手にゆだねる者は、奇跡を経験することが許されています。主イエス様を

イエス様の証し(3)

父である神を知るようになった者は、慰められ、希望に満ちて安らかに死に立ち向かうことができます。

最後に第七のイエス様の父に対する証しは、「父は、人間の理性にまさったお方である」というものです。ペテロはこのことを経験しました。

ユダヤ人が異邦人と親しくするのは律法に反することだと、まだ考えられていた時、ペテロは御霊による幻を見せられ、御霊の導きに従って、異邦人コルネリオの招きに応じて彼の家に入り、イエス様のことを証しましたのです。すると、みことばを聞いていた異邦人たちにも聖霊が下りました。その後、ペテロはその場にいなかった兄弟たちのためにエルサレムで次のように証したのでです。

こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが

自分の人生に受け入れた者は、次のことを知ることができます。

「私は、父である神の子であり、私の父である神にどんなことでも言うことが許されている。私は、信頼することができ。父は、必ず助けてくださる」。だから、イエス様は冒頭で語ったヨハネの福音書10章の中で、おっしゃいました。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。(ヨハネ 10・28、29)

この主のみことばほど、信じる者の永遠の安全をはっきりと証しているものはないでしょう。聖書が「永遠のいのち」という場合、それは決して滅びること

がなく、とこしえに続くことを意味しているのです。イエス様を信じる者は、永遠に失われることがありません。「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です」とイエス様は、私たちがイエス様の御手のうちにいることを約束しておられます。救われた者は、父の御手のうちに、そしてまた、イエス様の御手のうちに守られています。これは、永遠の安全を意味しています。ですから、パウロは次のように証しすることができました。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利

者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・35～39)

最後に、中国での出来事についてお話ししたいと思います。共産主義者たちは、数十年前にウォッチマン・ニーという主にある兄弟を、彼の信仰のゆえに刑務所に二十年間投獄しました。彼は、文字通り骨と皮に痩せてしまいました。

しかも共産主義者たちは、このウォッチマン・ニーを恐ろしい見せしめとして町中引きずり回したのです。イエス様を信じている者が見て、彼と同じ運命にあずからなければならないという恐怖を持ち恐れることを期待しながら。

ところが、結果は共産主義者たちとの考えとは正反

対のことが起こりました。信じる者は、ウォッチマン・ニーの光り輝く顔を見て、主の栄光をそこに仰ぎ見ることができ、どんなことがあっても主のためにだけ、生きなければならないと堅く決心したのでした。

父は、すべてにまさって偉大なお方です。ですから私たちは、もはや心配したり、恐れたりする必要がありません。私たちの信頼を通して、主は栄光を現わしてください。主である神に仕えることが許されているということです、そしてまた、全能である主を「父」と呼ぶことが許されているということは、何という素晴らしい特権でしょうか。



イエス様は預言された救い主

川鍋一吉

1. 創造主を信じる

初めに、神が天と地を創造した。（創世記 1:1）

旧約聖書の書き出し、一ページ目の最初のみことばです。これを読んで、神、造り主を信じた日本人がいました。それは、同志社大学の創立者新島襄（にじまじょう）です。

一八六〇年、十八歳の時に聖書に出会いました。

たったこの一節で神を信じられるなんて、私など驚き以外の何者でもありませんでした。ましてや、当時は江戸時代であり、禁教令が解かれる一八七三年（明治六年）の十三年前です。信仰を持つことは、家族全員の死

をも意味するものです。生半可（なまはんか）な気持ちで、信仰を持つことは出来ません。

新島は函館に一八六三年から潜伏し、一年後の一八六四年にアメリカへ密航しています。一八六五年十月、ボストンに着いて、身元引請け人となるハーデイ夫妻に「脱国の理由書」という手記を書き送っています。

「ある日、友人を訪ねると、彼の書齋で聖書を抜粋した小雑誌を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で書いたもので、聖書の中の最も重要な出来事が記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は家族全員をはりつけにするので、私は野蛮な国の掟（おきて）を恐

れていた。——そこで私はその本を置き、あたりを見回してからこう言った。『神が天と地を創造された。誰が私を造ったのか、両親か、いや神である。——そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない』その時から私の心は英語の聖書を読みたくらいという思いに満たされたので、函館に行つてイギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。」

れた言葉です。中村正直も一八七四年に洗礼を受けています。

それでは、なぜ武士階級の若い人々が比較的容易に創造主を信じることができたのでしょうか。

私たちが創造主を受け入れ難いと思ってしまうのは、神様を否定する唯物論やヒューマニズムに染まった戦後教育を受けた世代の先入観かもしれない。一方、当時の武士階級の人々は、幼少時から、古典（漢籍、国書）を教え込まれています。そのため、創造主がおられるということが、あまり抵抗もなく受け入れられたのではないのでしょうか。

明治の初期、クリスチャンの多くは武士階級の出身でした。新島襄をはじめ、内村鑑三（にむら けんさん）、新渡戸稲造（にわた とう いなぞう）、その他にも枚挙のいとまがないほど多士済々（たしさいさ）でした。「敬天愛人（けいてんあいじん）」を座右の銘とした西郷隆盛も漢訳聖書を読んでいたことは間違いないようです。鹿児島（かごしま）の西郷南洲記念館で、展示会「敬天愛人と聖書展」が行なわれた事があります。なお、「敬天愛人」と言う言葉は、一八七一年に中村正直（なかむら ただし）（明治時代の思想家、教育者）がサミュエル・スマイルズの『西国立志論』を和訳した時、その中で使わ

例えば、中国の古典では、造り主は天帝（上帝）と呼ばれて存在します。また、日本の古典では、古事記の序文の最初に、万物の造り主についての記述があります。そこを現代文に直すと「臣安麻呂（あまろ）が申し上げます。そもそも、混沌（こんとん）とした世界が固まり始めました。まだ、自然界

イエス様は預言された救い主

の大気の形は現われておらず、その名前も無く何も起こってはいませんでした。しかし、初めて世界が天と地とに別れ、三柱の神が万物の創造のはじめとなった¹。

ここには、三人の創造の神様が現われると書かれています。この三人の神様は「造化三神」と呼ばれています。古事記本文の最初には、短い文章で多くは書かれていませんが、造化三神の最初の神の名があります。「天之御中主神」です。聖書の父なる神(創造主)を連想してしまうような名前です。江戸後期の国学者・神道学者の平田篤胤は、明治以降の国家神道ではなく、古事記成立(八世紀)以前の古新道について研究していました。平田の弟子筋の渡辺五重丸は、『天之御中主神考』において、聖書のいう神ヤハウェ(創造主)と同一だと書いています。

新島にも古事記を人に教えられる素養がありました。新島が函館に潜伏中、ロシアの領事館付の司祭で後にお茶の水のニコライ堂を建てたニコライがいました。新

島はニコライに日本語と古事記などの手ほどきをしています。ニコライは聖書に興味を持つ新島に自分の弟子になるよう勧めましたが、彼のアメリカ行きの意思を変えることが出来ませんでした。

古典に慣れ親しんだ人にとっては、創造主がおられるという考えは奇想天外なことではないかもしれせん。聖書では、創り主がおられることが当然の約束事です。神は名前を尋ねられたモーセに仰せられました。

「わたしは、『わたしはある。』という者である。」

(出エジプト 3・14)

この神は、すべてのものを創造した神、全てのものを存在なさしめる方であります。その方こそ、実際に「ある」方であり、「現にいて、生きて働く」お方です。

2. 三位一体の神様

初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみがたいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。(創世記 1・1〜3)

この聖句の「神」は、原語では複数形です。しかし「神々は…」と訳さないのは、「創造された」の動詞が単数形だからとのこと。これは神の三位一体を示すものです。

しかし、ここには、天地創造において、神の霊はありますが、神の子イエス様が明示されていません。イエス様が明示されている箇所がヨハネの福音書1章にあります。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つも

私がイエス様をまだ信じていない頃、ベック宣教師の書齋で生前お交わりした時のことを思い出します。その頃は、ベック宣教師は、まだイエス様を信じておられない方に福音を伝える時、三角定規を使われていました。父なる神、イエス様、聖霊のことを、三角定規の頂点を示して教えていただきました。

三位一体についての説明でした。父なる神、御子イエス、聖霊は三位一体ということです。

しかし、私はどういふことか理解できませんでした。おぼろげながら、創造主はおられるのではないかと考えていましたが、かえって、わからなくなってしまうしました。これが、何を意味するのか、どういふことなのか混乱してしまった記憶があります。特に、御父、御子イエス、聖霊との関係について、想像できない状態でした。三位一体という言葉そのものは、聖書にはどこを探してもありません。しかし、聖書には神が三位一体であることが記されています。聖書から見えます。

イエス様は預言された救い主

ない。(ヨハネ 1・1～3)

ことは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1・14)

いのちを与えるのは御霊^{みたま}です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。(ヨハネ 6・63)

「ことば」は聖霊でもあります。これらの聖句の中に、父なる神、神の御子キリスト、それに聖霊(神の霊)の三者が存在しています。これは、天地創造が三位の神によってなされたということです。御父、御子、御霊の区別と、その一体性は、天地創造の昔からのものだということです。

聖霊はイエス様がバプテスマのヨハネから水の洗礼を受けた時、イエス様に下りました。イエス様はその時から、聖霊に満たされ、力ある宣教を開始されました。イエス様が十字架から復活され、昇天された後、現代では聖霊が私たち信じる者にも下されます。

しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。(ヨハネ 16・7)

私たちは心でイエス様を信じ、私たちのうちに聖霊が下り、恵みによって救われます。

しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、神は、私たちが行なった義のわ

ざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。(テトス 3・4～6)

(ヨハネ 3・16、17)

3. イエス様は聖書で預言されたメシア(救い主)

イエス様は、神様からの良き知らせを私たちに伝えようとされました。ヨハネの福音書にこう書かれています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

イエス様は預言された救い主

イエス様はキリスト教という宗教を伝えたとは聖書のどこにも書かれていません。かえって、宗教を非難しておられます。当時のユダヤ教の指導者である律法学者らを何度もやり込めています。イエス様は人の教え、人の作った宗教を離れ、ただまことの神に立ち返れとおっしゃっておられます。

イエス様は、社会的に上に立つ偽善の宗教家が自分は正しいとおごり高ぶり、宗教的な素養^{そよう}を持たない弱者を見下している様をたとえて話されています。

ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。「神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫^{かんいん}する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみ

な、その十分の一をささげております。」ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。

(ルカ 18・10～14)

このように、神様は自分を低くし、神様を愛し求める人を愛されます。宗教には関係しません。

ユダヤ教の教えでは、自分を神とすることは死刑にあたります。宗教家たちはイエス様を神の子とは決して認めません。宗教家たちは、イエス様によって自分たちの権威を貶められ、権益が侵害されていることが面白くありません。イエス様が人々へ宣教するのを止めさせるため、イエス様を殺そうと計画していました。しかし、イエス様を「神の子」、預言者、または世俗的なユ

ダヤの王になると信じている多くの民衆が周りにいて、なかなか手を出せないでいました。

イエス様と弟子たちは最後の晩餐の後、オリブ山でお祈りをするために出かけました。この時、裏切りの弟子ユダの手引きにより、エルサレムの宗教指導者により集められた群衆によって、イエス様は捕らえられ、大祭司カヤパの家まで引つ立てられました。そこで、祭司长たちと全議会はイエス様を死刑にするための審問を行なっていますが、証拠はつかめません。最後に、大祭司は審問に黙って何も答えられないイエス様に「あなたは神の子キリストなのか？」と問いかけました。それに対して、イエス様は答えました。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります」(マタイ 26・64)。大祭司は言いました。「神への冒瀆だ。…あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです」(マタイ 26・65)。

祭司长たちや全議会は答えて、「彼は死刑に当たる」(マタイ 26・66)。こうして、イエス様はローマのユダヤ総督ピラトに引き渡され、十字架の刑に処されました。

イエス様に関する預言は、旧約聖書の中にたくさんあります。多くの解釈者たちはメシヤ(救い主)についての預言は何百もあると言います。その中で、イエス様の十字架の死に関して、最もはっきりした預言はイザヤ書 53 章の全文です。このイザヤ書 53 章は、イエス様の十字架の意味、意義が預言されています。イエス様が自分勝手な私たちの罪、咎のために身代わりになって罰されたことが書かれています。それにより、私たちは病痛みをいやされ、平安をいただけます。イエス様のいのちは、私たちの罪過の贖いのために捧げられるいけにえとなりました。これは主(父なる神様)のみこころだとあります。

ユダヤ教では旧約聖書も読まれますが、『タルムー

ド』という教典——先祖から言い伝えられた「口伝律法」と宗教学者たちの議論からなるもの——も読まれます。イザヤ書は旧約聖書の預言書にありますが、イザヤ 53 章だけは除外されて、読まれないそうです。イザヤ 53 章は自分たちの教えを守ろうとする人にとって、いかに都合が悪いかを示唆しているように思えます。

イエス様は、十字架にかかるだいたい前から、ご自身が罪人のために死なれること、三日目によみがえることを弟子たちに何度か話されています。全て聖書(旧約)の預言の通りのことだと語っています。罪の身代りとなる犠牲こそ、イエス様がこの世に來られた使命です。しかし、おそばにいる弟子たちでさえ、この時にはイエス様が聖書で預言された救い主だと本当のところはわかっていませんでした。

ペテロをはじめとする弟子たちは、イエス様がご自分の死について予告された時、「あなたを知らないなどと言いません。」と大見栄を切っていました。しかし、イ

イエス様は預言された救い主

イエスが捕らえられた時、弟子たちはちりぢりに逃げ出してしまいました。弟子たちはみな自分の命が惜しいという臆病者でした。また、この当時でも人間が復活するということは荒唐無稽な話でありました。

こんなに勇気がなく、情けない弟子たちがなぜ命を懸けてまで、全世界への宣教に駆り立てられたのでしょうか。それは、弟子たちが、復活されたイエス様にお会いし、本当に目の当たりにしたからです。

バプテスマのヨハネは、イエス様に初めてお会いした時、イエス様は父なる神から送られ、人々の罪を取り除くために用意されたまことのいけにえだと、その本質を見い出しています。そして言いました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

(ヨハネ 1・29)

イエス様は聖書で預言されたメシア(救い主)です。



川鍋 一吉 (吉祥寺キリスト集会)

全ての事が益とされる

中山 晋一



神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

生い立ち

私は一九五八年群馬県館林たなばやしに生まれ、祖父母、父母、姉と私の六人家族のごく普通の家庭で育ちました。私の家の周りは祖父も父も勤めていた鉄道会社の社宅が多く、勤め人の家庭ばかりでしたので、成長したら外に出て働くという暗黙のコンセンサスが家族にはあったと思います。大学は「つぶしが効く」とか「就職に有利」と言われていた法学部を選びました。大学は就職の通過点と考えていて、勉強は余りせず登山の同好会の仲間と旅行や山登りばかりしていました。このようにして、当時「ノンポリ」(nonpoliticalの略)という言葉が良く使われましたが、素直に現実を受け入れ、その場その

場でうまく立ち振る舞うという私の習性が作られました。就職は好きだったオートバイの仕事がしたいと考え、自動車会社に就職しました。最初の配属先は大阪の営業所で、その後は東京勤務となり、三十代後半からは海外勤務が多くなり、定年までの四十年間、同じ会社に勤めました。その後は家族の住む埼玉県に戻り、現在は地域の民生委員や春日部集会のご奉仕をしています。

この様に書きますと単調で順調な人生を歩んだと思われるかもしれませんが、実際には家庭でも仕事でも様々なことがあり、結構変化のある人生でした。そしてその過程では大きないくつかの出来事が起こされました。これらのことは一般的には偶然の一言で済まされるかもしれませんが、しかし今の私には全てが主の恵みであり、ご計画であつたということを確認することができます。

長男の死と妻の救い

を通じて知ったベックさんでした。私はタイのバンコクに異動となり、同行した妻は、私の会社の先輩の奥様から信仰のことや集会のことを聞くようになりました。その方を通して、当時毎年行われていたバンコクでのバイブルキャンプ(以後、喜びの集い)に妻は導かれ、洗礼を受けることになりました。お交わりして頂いたベックさんから、「召された子供には天国で必ず会えるよ」と言われたことが、妻が救われた一番大きな理由でした。私には過去の事である長男の死は、彼女にとって現実の悲しみであり苦しみでした。私にとってもその悲しみから妻が解放されたことは大きな喜びであり、集会のご兄弟姉妹に心から感謝しました。又喜びの集いに集まる大勢の兄弟姉妹の笑顔には圧倒される思いがしました。見知らぬ人たちでも、まるで旧知の様に私に名前前で呼びかけてくださり、それは私の知っていた人々とはかけ離れていました。会社というところは競争社会で価値の基準は上下関係と勤務評定で、心から許し合

私たち夫婦にはなかなか子供が与えられず、妻は不妊治療を始めましたが、すぐには良い結果は出ませんでした。そして会社の先輩から紹介されて、当時はまだ珍しかった体外受精により妊娠しました。ところが予定日を過ぎても出産せず、予定日から一週間経って胎盤剥離のため死産となりました。緊急の帝王切開によって妻は助かりましたが、子供は助かりませんでした。予定日を過ぎた子供は、髪も爪も伸びており、助けてあげられなかった私たちの後悔と悔しさ、悲しさは筆舌に尽くし難いものでした。しかしこの後に信じられないことが起きました。妻は死産後すぐに妊娠が始まり、死産から十一か月後に娘が生まれました。長男が召されたのが一九九四年八月四日、長女が生まれたのが翌年七月四日です。私は娘が生まれたことで、長男のことはすぐに忘れてしまいました。妻は元気な娘を見ると却って悲しみが増す様でした。

そのような妻を救ってくださったのは集会のご兄弟

える人はいませんでした。しかし、私はこの時に主を受け入れることはできませんでした。私は自分の仕事に對するプライドも将来への夢も充分過ぎる程持っていましたし、召された長男に代わってすぐに長女が生まれたことも、自分自身の力で困難を克服したという思いに変わっていました。男として逞しく生きれば結果は自然についてくる、「意思あるところに道は通じる」という信念こそが重要であると考えていました。長男が召された時にあれほど悲しみに打たれた人間が、わずかな期間に、信じられないほど傲慢な人間になっていました。妻は主イエス様を信じ、救われましたが、私は素直な心を持って自分中心な心の状態でした。

私の救い

私はタイから東京に戻り管理職になり、なんでも自分が決められるというような思いに支配されていました。私の上には部長も役員もいるので、そんなことはあ

り得ないのですが、そんな私に突然インドへの異動が告げられました。赴任先は現地資本中心の合弁会社で、七千人程の社員に対し、日本人は五人だけで、私には通訳もいませんでした。私は唯一の営業系役員として多忙を極めました。今までの日本での経験はまったく通用しませんでした。過酷な仕事と人間関係に悩み、次第に追い込まれていく自分を感じていました。今まで会社を信じ、人から信頼されて、会社を全てとして生きてきた典型的な会社人間であった私にとって、今まで頼りにしてきたもの、信じ切っていたものから突き放された様に思いました。インドは全ての環境が日本とはまったく異なり、日本人には厳しい環境です。このようなどころにも、家族は一緒に生きてくれました。この家族との時間は唯一の慰めでしたが、次第にこの慰めでは癒やすことのできない程、追い込まれていきました。この時にバンコクで喜びの集いがあり、妻は子供を連れて参加することになりました。私は行く予定

にしていまふたしたが、仕事でバンコクに出張した際、機内での抽選でバンコク・ニューデリー間の無料チケットが当たったのです。私は妻が洗礼を受けたバンコク喜びの集いの温かい光景を懐かしく思い出し、そこには自分を救ってくれる何かがあるように思い、バンコクに行くことにしました。

参加した喜びの集いは予想通りの喜びに満ちた集いでした。そしてベックさんのお部屋に招かれ、二人でお交わりの時が与えられました。その時、私の目から涙が溢れ、四十代半ばの男が人前でよくここまで泣けるものだと思ふでも不思議でした。私は自分の置かれた環境や悩みをベックさんに正確にお伝えすることはできませんでしたが、ベックさんは私の涙の理由を召された長男のことと思われていましたが、私には「無理する必要はない、ただ神様にごめんなさいと謝れば良い」ということばで充分でした。その時に頂いた冊子には、マタイの福音書六章からのみことばが書かれていました。

空の鳥を見なさい。種^{たね}蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つか、よくわきまえない。働きもせず、紡^{紡む}ぎもしません。
(マタイ 6・26-28)

私は働けば必ず報われると信じ、会社は自己実現の場であると考えていました。しかし、そのような私の考えは音を立てて崩れ去っていききました。頼るものを失った私に、このみことばは新しい生き方を示している様に思われました。そして信じられないことに、インドに戻るとオーストラリアへの異動の内示が待っていました。私の状況を心配した複数の上司が私の異動に関

わっていたことを後で知りました。ベックさんの言う「頑張らなくてよい」とはこのことなのか、と思ひました。人の思ひでは考えられないことを主は成してくださると思ひました。私は窮地から一氣に救ひ出されることになりました。インドでの二年間は、私の人生でも苦しい時期でしたが、信仰に導かれる大変重要な時となりました。

マタイの福音書二十二章で、パリサイ人に「税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。」(マタイ 22・17)と聞かれたイエス様は、「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」(マタイ 22・21)と答えられました。この時からの私は、仕事と自分を割り切つて考えることができるようになりました。そして、オーストラリアの美しい自然の中で家族と過ごした素晴らしい月日をくださった主に心から感謝しています。

私の受洗と日本帰国後のこと

二〇一〇年に上海に赴任しました。中国のビジネス環境は厳しく、私の仕事の責任は益々重くなりましたが、もう仕事にのめり込むことはありませんでした。住居は環境が良く子供たちの通う日本人学校の近くに決めました。集会は、バンコクで一緒に過ごした兄弟姉妹もいらっやって、毎週礼拝を持つことができました。上海で喜びの集いが開かれ、ベックさんも病気をおして来て頂けることになりました。私は今回を逃がしたらもう機会はないと思い、二〇一一年七月の喜びの集いで洗礼を受けることにしました。上海にいた四年ほどの間に三度の喜びの集いが開かれ、多くの兄弟姉妹が上海に来てくださいました。上海集会は小さな集いでしたが、礼拝が生活の中しっかりと根付いたこと、祈りの課題を兄弟姉妹と共有して祈り合うことを知ったことは、私の信仰にとって重要なものとなりました。また礼拝を共にしていたご夫婦のご長男が島根の愛真高校に

行くことになり、このことが息子の進学にも繋がりました。妻の受洗から私の受洗まで十四年もの長い時間が経っていました。主は、私の様な者に対し、妻の救い、インドでの試練と私の救い、上海での恵み、という事やその時々に関わってくださった多くの兄弟姉妹を通じて、長い時間をかけて私のかたくなな心をほぐし、主に従う者としてくださいました。

その後、二〇一四年に私は札幌に異動、妻は埼玉、娘は大学進学で名古屋、息子は高校進学で島根と、今までどこに行くのも一緒だった家族が一気にバラバラに過ごすことになりました。主が中心にいてくださるという確信だけが頼りでした。札幌では集会の問題が起きました、多くの兄弟姉妹から励ましを頂いて集会を存続させることができました。二〇一九年の札幌喜びの集いでは、五十名程の兄弟姉妹が北海道まで来てくださり本当に恵まれた時間を過ごすことができました。私は二〇二〇年に定年退職となり札幌を離れ、今は姉

妹方だけの集会となりましたが、ZOOMを通じて多くのご兄弟が支えてくださっています。

現在私は春日部集会で、連絡係として奉仕させて頂いています。今まで小さな集会ばかりでしたが、今は多くのご兄弟と共に主を賛美できることを感謝しています。

家族のこと

妻の智恵子は我が家の初穂(家族の中で初めてイエス様を信じ救われた者)です。大変明るく外向的な性格で、どのような環境でも前向きに生きていける、私たち家族にとって頼もしい存在です。仕事ばかりしている私に代わって子育てをし、日本帰国時は同居の私の両親の面倒をみてくれました。私のメッセージ担当番の時は車の運転をしてくれる頼もしい助け手です。

娘の多恵は上海からの帰国後すぐに始めた一人暮らしが重い負担になり、大学を休学し一年間の海外留学

をしました、最終的に大学は中退することになりました。埼玉に戻り語学学校を経て、現在は好きな英語を活かしてIT関係の会社で働いています。本人から急に受洗したいと言いだし、二〇二四年五月の御代田喜びの集いで洗礼を受けることになりました。一人暮らしをさせたことに後悔はしましたが、そのこともまた彼女の信仰の為には必要であったと今は感謝しています。

長男の泰^{ゆたか}は島根の愛真高校に入りました。この学校は内村鑑三の始めた無教会の方が作られた全寮制の高校です。本人は小学校の時、給食をまったく食べない酷い偏食で、一人遊びの好きな子でしたが、寮での共同生活で先輩や友人に鍛えられ、なんでも食べ、対人関係でも物怖じしない様になりました。高校の時に海釣りを覚え、海なし県である埼玉からの脱出を希望し、現在は長崎に本社のある会社の山口営業所に勤務しています。本人は主イエス様を受け入れているとは口に出し

7人の証し

ませんが、先日、旧知の兄弟がメッセージの当番の際に誘ってください、山口集会の礼拝に参加することができました。これから人生の荒波を乗り越える度に受ける数々の試練によって、必ず主の恵みを必要とする時が与えられると信じています。

母は九十四歳です。五年ほど前に自宅で倒れ、今はホームに入っています。記憶ははっきりとしています、腰と膝が悪く、目は殆ど見え、耳も遠く、ほぼ寝たきりの状態です。年々気弱になり、最近「あなたの信じている天のお父様に、早く天国に行ける様に祈って頂戴」と言います。私の祈りを静かに聴くと、子供の様な安心した表情を見せてくれます。

全ては主のご計画

人生には様々なことが起きますが、今振り返ると、そこには主の恵みとお働きという一筋の道があったことを思います。時には残酷で不幸と思われても、必ず最善

の道に導かれます。私の生涯に起こされた様々な出来事の全てに主が働いてくださったっている、ということ、確信を持って言うことができます。もし信仰がなければ、起こされたことは単なる偶然であり、運が良いとか悪いとか、その場で一喜一憂し、最後は運命として受け入れるということになるように思います。信仰があれば、何が起こきようと、それは主がなさることであり、主はかならず最善をなさる方ですから、起こされたことへの疑問を持つことはありません。それは、どのような悲しみや苦しみであっても、主がそばに居てください、その愛と慰めは私たちに注がれていることを確信できるからです。そして、私たちの周りには、いつも明るく温かな兄弟姉妹の祈りと支えがあったことを覚えます。その支えがなかったら、今日の私たちはないと断言できます。そして私たちの歩く道はこの世で終わるのではなく、天の御国に続く道になる、これからの人生も何の不安もなく歩める、このことを確信できることを本

当に感謝しています。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ペリピ 4・6、7)

中山 晋一（なかやましんいち）

一九五八年 群馬県館林市生まれ、埼玉県蓮田市在住
群馬県立太田高校 立命館大学法学部 卒業
本田技研工業入社、北海道ホンダ販売転籍、二〇二〇
年定年退職

妻 智恵子（ちえこ）

長女 多恵（たえ）

長男 泰（ゆたか）

母 静枝（しずえ） 二〇二五年五月六日 九十五歳で
召天

まことの神様に出会うまで

松田 節子



松田節子さん(中央)、集会の姉妹方とともに

私は今、吉祥寺キリスト集会の礼拝や家庭集会に集わせていただいていることがとても嬉しく喜びです。本当に感謝しています。

私は目が見えないので、一人で集会へ来ることができません。集会の姉妹方によって助けられて来ています。本当に皆様に感謝申し上げます。そして神様が私のために必要な人たちを備えてくださったことを感謝しております。いろいろな方々がそばへ来て声をかけてくださるのも本当に嬉しくて、ここへ来るのがとても楽しみです。

キリスト集会との出会い

私はこの集会へ来る前は、長年、他の教会で信仰生活をしていましたが、いつ頃からか、教会生活の楽しさが感じられなくなってきました。私にも何か原因があったと思うのですが、もっと喜びのもてる教会に行きたい

と思うようになりました。

信仰書などを読んでいると、「福音」や「聖霊」という言葉が出て来ますが、以前の教会ではあまりそういう言葉を聞かなかったので、なにかおかしいと思っていました。そういうことから「喜んで、安心して交わりができる教会に行けますように」とイエス様に祈り続けていました。

そういう中で三年ほど前(二〇二二年頃)に、この吉祥寺キリスト集会のことを聞いて、もう藁(わら)をもつかむ思いで、早速電話をしました。なかなかつながらなかったのですが、最後に火曜日の朝十時前にかけてやっとつながりました。電話に出てくださった姉妹に、「喜んで信仰生活がしたいのです」ということを話しました。そして私は目が見えないし、耳まで悪いので、ご迷惑かけることも正直に言いました。話すのは本当に辛かったのですが、神さまはすべてをお見通しなのだから、正直に本当に喜べる信仰生活がしたければ、私も

真実な態度でいなければいけないと思って話しました。するとその姉妹が、「いいです。迎えに行きますよ」と言ってくださり、本当に車で迎えに来てくださったのです。

初めて集会に行ったときのことですが、本当に申し訳ないことをしてしまいました。私は目だけではなく耳が悪いので、メッセージの「声」は聞こえても、何を言っているのかわからないのです。それで、以前、教会で使っていた「発信機と受信機」という機器を持って行きました。集会には「ヘッドホン」が準備されていると聞いていましたが、私は前から使っているその機器でなければ牧師さんの声は聞こえないのだと思い込んでいましたから、「機器を使わせてください」と厚かましく言っただけで使わせてもらいました。後で、それを使うと電波の関係なのか他の人々が聞くのに邪魔になるということが分って、それからは勧めてくださった通りにヘッドホンを使って、普通に聞くことができるように

なりました。本当にその当時のことを思うと、申し訳なかったと思います。

このようにして、毎週というわけにはいきませんが、集会に通うことができるようになりました。

点訳された『実を結ぶ命』(若くして召されたりンデさんのことを書いた本)や『光よあれ』(集会の証し集)を読ませていただきながら、いろいろと集会のがわかるようになりました。ベックさんの福音メッセージも証し集の中にありました。

「聖書のみことばのみに立つて、主だけを中心にして、交わりを大切にしている人々の集まり」ということ、そして人間が作った「何々しくなくてはいけない」という規則にとらわれないで、本当の信仰、つまり自分の罪を悔い改めイエス様を信じることによって神さまの子とされて、そして「永遠のいのち」をいただけるという本当の真理に触れるならば本当に自由だ、と知りました。以前の教会ではいろいろな束縛があり自由ではない部分

特に最近、私はヤコブの手紙1章21節にあります、
「御言^{みことば}には、あなたがたのたましいを救う力がある。」(口語訳)ということ 생각합니다。ですから必死になってみことばに触れて、「嗚呼！」と感動することが多いのです。

私は目が見えませんが、耳も少しは聞こえますが中等度難聴です。年齢からすれば難聴になってもおかしくないかもしれませんが、六十代の早いうちから中等度難聴でした。目の病気は網膜色素変性症というのですけれど、実はこの目の病気の人はまれに聴力障害も伴うことがあるそうです。アッシャー症候群という難病の一つで、私の場合は所沢のリハビリテーション病院で診断されました。中等度の難聴というと、五、六人が集まっているいろいろな人が会話している中にと、話しいについていけません。ひとりずつが交代で話すのではなく、同時に話されると何を言っているのかわからない状態になります。これも一つの試練でしょうか。

7人の証し

Unser Herr lebt

があつたのですが、「本当の信仰に立つたら自由だ」ということを教えられました。ヨハネの福音書8章32節に「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」とあります。私はなんだか、広々とした海原に出て、そよ風を受けるような、解放感、ほっとした気持ちになって、この集会に通わせていただいております。本当に嬉しいのです。

それに点字の賛美歌集も用意されているので、自分がただ聞いているだけではなくて、兄弟姉妹と一緒に歌うことができるというのは嬉しいのです。教会によつては、新しい賛美歌が点訳されていないので一緒に歌えなくて、聞いているだけというところもあります。

御代田にある国際福音センターにはいろいろな点字の書物が読み切れないくらい用意されていて、毎日、楽しみに少しずつ読むことができて嬉しく思っています。

みことばにはたましいを救う力がある

でもみことばは、コリント人への手紙第一10章13節に「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることができるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」とあります。本当にそうだと思います。そのみことばで本当に嬉しくなります。もう一つ、もっと嬉しいみことばがあります。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。(イザヤ42・16)

これを読んでも、みことばにはたましいを救う力があるというのは本当にそうだなと思います。

また、証し集『光よあれ』など集会の書籍をずっと読んでい中で、ベックさんが「不幸」という言葉の意味

を説明したところがありました。「不幸というのは、故郷に帰る道しるべ」と書いてありました。そして故郷というのは「心の故郷」のことで、ドイツ語では「不幸」というのはそういう意味だそうです。だから不幸というのは「心の故郷へ帰る道しるべ」。心の故郷というのは「神さまのみもと」ということで、「不幸」が神さまのみもとに行く道になっている。だから、ベックさんは「不幸は悲しいことじゃないんだよ、喜ぶことだよ」と。だから本当に幸せになりたいのだったら、不幸を知ることだよ」とあるのです。それを読んで、なんだかとても嬉しくなって、「ああ、そういう意味なのか。ここで沈んでなんかいけない」と思いました。やはり目が見えない、耳が悪いということはこの世的には不幸です。でも神さまは、そんなふうには見ておられない。「不幸はイエス様のみもとへ行く道しるべだよ」。「だから素晴らしいことなのだよ」とベックさんが書いておられました。ヨハネの福音書にも、「彼が盲目に生まれついたのは、

だれが罪を犯したからですか(ヨハネ9・2)とありますが、イエス様は「神のわざがこの人に現われるためです」(ヨハネ9・3)と答えられました。本当にそうです。あの神さまのみもとへ行くことができるのだから、喜びをあらわすことができるのだと思います。あるとき、集会の姉妹が計画を立ててくださったって、ベックさんにお会いしました。集会の始まる一時間くらい前に行って、お話しができたのですが、最後にベックさんが「松田さん、目が見えなくなったって言うけれど、それは神さまが最善を尽くしてくださっているんだよ」と仰ったのです。それでその時、意味が分かったのです。「神さまが最善を尽くした」。この世的には不幸かもしれないけれど、神さまが最善を尽くして、神さまのみもとに行けるようにしてくださったという意味だと思いました。それから嬉しくなりました。だから「こんなに嘆いたり、悲観したりしちゃいけない。日常生活も明るく生きていこう」と思いました。やはり、みことば

は本当にたましいを救う力がありますし、とても味わいがあります。次の有名なみことばもあります。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

(イザヤ41・10)

「義の右の手で、あなたを守る」というのはとても具体的に力強いです。でも本当に「神さま、そうしてください」と祈ることができます。なんだか嬉しいですね。それから同じイザヤ書にこうあります。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

(イザヤ43・1、4)

本当にそうです。神さまは私を贖ってくださったのです。今まで私もいろんな罪を犯してきました。本当に神さまに申し分けないと思っています。でも贖ってくださり、今は神さまの子としていただいています。そして天国も約束してくださっています。だから本当に嬉しいのです。そしてまた「あなたの名を呼んだ」とあります。漠然と神さまが誰にでも言っているのではなくて、直接、私に働きかけてくださっている、神さまのこの愛がつくづく分かって嬉しいですね。「ああ、こんな私でも高価なのか、尊いのか」。だから「ダメな人間だ」とか、自分に劣等感を持つてはいけないと思います。

私はマンションで一人暮らしをしているのですが、日常生活でいろいろなことがあります。でも、「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」(1ペテロ5・7)というみことばがありますから、「そうだ。こんなこと心

配しないで、神さまにゆだねたらいいんだ」と思います。毎日生活する中で、「ああ、みことばって、たましいを救う力があるんだなあ」と思います。

また一人暮らしをしていて、今まで特に怖い目に遭ったことはありませんが、箴言1章33節には「わたしに聞き従う者は、安全に住まい、わざわいを恐れることもなく、安らかである。」と書いてありますから、「そうだ。みことばにいつも聞き従っていかなければいけないんだなあ」と思います。

毎日読む聖書の中には、たくさんのみことばがあつて、私にとって必要なものばかりですが、覚えきれません。そこで、これらのみことばを通して、神さまが教えてくださった究極の有名なみことばがあります。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。(1テサロニケ 5・16、18)

連から東京、名古屋、それからまた戦争に遭い、長野県に疎開したり、富山へ行ったりしてまた名古屋に戻りました。

ちょうど名古屋に二度目に戻って、私が小学校五年生の時に父が亡くなりました。それで、社宅を出なければならなくなり、翌年の三月に東京へ引き上げて、母の実家の隣に住みました。私たち兄弟は祖母に面倒を見てもらふことになり、お世話になりました。小学校はそういうわけで、富山、名古屋、東京と三回変わりました。

目の方はずっと悪かったのですが、小学校一年生の時はまだ字が大きかったから、「こまいぬさん」という教科書の字も見えました。ところがだんだん学年が上にあがるにつれ、教科書の字は小さくなるし、黒板の字も見えないので、結局、「お客さん」で通しました。

中学一年生になる時に、初めて進路を考え、このままではとてもやっていかれないと思いました。黒板の字

本当にそうです。みことばを通して、いつも神さまは約束してくださるのですから、いつも喜べますし、また神さまとつながっていないくてはいけなから、「絶えず祈りなさい」なのです。そしてどんなことがあっても神さまは見捨てないお方ですから、すべて感謝しなさいとあります。本当に嬉しく思います。

以上が私のいま現在の証しですが、少しでも私の生い立ちと、クリスチャンになったきっかけについてお話しします。

生い立ち

私は大連(中国)で生まれました。両親は東京の池袋出身で、関東大震災にもあっています。私が一歳になる前に消化器系の病を患ったので両親が心配して、東京に戻ってきてから聖路加病院に入院することになりました。その頃から目が少しおかしいことに気がついて、あちこちの眼科に通いました。父は転勤族ですから大

は見えない、教科書は見えない、試験があっても、何が書いてあるか分からないから、ぜんぜん話になりません。それで進路調査があった時に、「盲学校に行きたい」と母に自分から言いました。もちろん母も分かっているのですが、父が亡くなった後、仕事で大変だったから、心で思っている、なかなかそこまで手が回らなかったのだと思います。

私の方はやはり目が見えないことで、精神的にストレスがあったり、また名古屋では、大変ないじめにも遭い、小学校の時から、学期が終わることに寝込んで、今という過敏性腸症候群で、お腹が痛くなって下痢をして、という症状を繰り返していました。

盲学校に入ってから、一生懸命点字を覚えて、読むことも、書くこともできるようになり、本当に嬉しくて勉強に励むことができました。そして高等部に入り、だんだん上に進むにつれて、自分が目が悪いというこ

とよりも、人間として人生に対して空しさを感じるようになってきました。また進路のこともどうすればいいのか、勉強も手に着かないような状態でした。それでキリスト教の教会に自分から行くようになったのです。

クリスチャンだった祖父と叔父

私の母の父親(私の祖父)と母の弟はクリスチャンでした。祖父は外国人との交流もあって、クリスチャンになったそうです。そして毎日、食事の時は家族のためにも祈ってくれていたそうです。私たち姉妹は、まったく祖父や叔父には会ったことはありませんが、話は母から聞いていたので、祖父や叔父のような人になれば、私も救われるというか、いい人生を生きられるのではないかと、教会に行きました。

祖父はとても優しい人柄だったようです。そういう話を母から聞いて、私は絶対キリスト教は良い宗教だから、そういうところへ行けば良いにちがいないと思っ

て、行くようになりました。礼拝にも出席するようになって、その中で、マタイの福音書11章28節「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」というみことばに感動して、自分が罪深いということを思うより、とにかく自分が救われたい、本当に満たされた生活がしたい、この空しい生活を何とかしたいという一心で洗礼を受けました。

そして上の学年に進むにつれて、将来を考えなければならぬという時期になりました。その時、教会でエペソ人への手紙2章10節「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」というみことばに接し、こんな私でも何かをしなくてはいけないと奮い立たされ、一生懸命勉強して盲学校の先生になろうと思いました。

就職先は三重県の津市でした。それから退職するまでの大変長い間は省略します。ただ、私の会ったことのない学徒出陣で戦死した叔父が、三重県の鈴鹿の連隊にいたのを後から知りました。

その叔父は戦地に向かう時、家族の誰にも会えないまま内地から台湾に渡ったそうです。日本を去る時に、家族に対して、会いに来るようにと連絡があったそうですが、東京の方では祖父が病気で、また母の妹も結核で、とても行かれないので名古屋に住んでいたうちの母のところに、会いに行つてやつてくれと連絡があったそうです。ところが、あの戦火の中を、三人の幼子を連れてはともに行けませんでした。母は後で、大変後悔することになったそうです。ですから叔父は、大変淋しい思いをして、日本を去りました。けれどもクリスチャンでしたから、きつと、祈っていたと思います。

そして最後まで、教官という立場ですから、残っていたのですが、最後は負け戦になっていて、飛行機がなく

て、潜水艦で台湾海峡を渡る時に、アメリカの魚雷艇に攻撃されて沈んでしまいました。その時の叔父のことを思うと、どんな思いで、どんな祈りをささげて召されていったのかと思います。

祖父にしても、その叔父にしても本当に家族の救われることを祈っていたはずです。また叔父は特別に淋しい思いをしていますから、天国に行ったら、私が姪だと会って告げたい気持ちです。祖父にも「私は孫です。私も救われてきました」と報告したい、そんな気持ちになっています。こうして三重県の鈴鹿の連隊と叔父との関係で、三重県に就職できたということが、なんだか不思議な気がしています。

私はこれから、あとどれくらい生きられるかわかりませんが、この世にいる間は、ベックさんが「神さまが最善を尽くしてくださっているんだよ」と仰ったことを思つて、明るく生きていきたいと思えます。

7人の証し

松田節子（まつだせつこ）
昭和十四年九月十七日 大連（中国）生まれ
東京教育大学教育学部特設教員養成部（盲教育部）卒業



暗闇から聖霊の望みの中へ

矢野 一美

私は現在七十九歳です。二十一歳の時にイエス様を信じ、以来独身で信仰生活を送って来ました。

復活したイエス様を信じて、驚くべき永遠のいのちの光、天からの永遠の喜びの霊的なぶどう酒、聖霊の恵みを受けました。キリストの体の一器官として迎え入れられ、やがて栄光の教会となって主の前に立たされること、将来神の子羊（キリスト）の花嫁となり、子羊の婚宴へと連なり、また神の右の座で主とともに天に座することが確かなものとされていることを感謝しています。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいます。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒



一美さん

りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——

キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした。(エペソ2:1-7)

私は昭和二十一年、大分県の北の国東半島の内陸にある朝来谷あさきたにの小さな貧しい村に、五人兄弟(男三人女二人)の末っ子として生まれました。家は半農半林、父親は頭に傷を受けて、戦争から帰って来ていた傷痕軍人でした。神仏混淆しんぶつこんこうの偶像崇拜による闇やみの力が強く働いている所でした。祖父は大変信心深い人で、朝晩、神棚・

仏壇に手を合わせていました。私もよく水や御飯を供える手伝いをさせられていました。

父は短気な人でしたが、戦後初めて生まれた子供と言うことで、私には日ごろ子煩悩こぼんのうでやさしく接してくれていました。けれども酒を飲むとよく母をいじめ、泣かせていました。幼い私には大変ショックで人間不信と不安の闇が入ってきました。中学生になると、よく裏山に登り、原っぱに寝ころがって空を眺めたり、遠景を楽しんだりして自然の中に安らぎを求めていました。中学校を卒業して近くの町(杵築市きづき)にある進学校に入学しましたが、その時に町のクリスチャンの有志の人たちからギデオン協会の無料配布の聖書を受け取りました。英語を勉強するつもりで読み始めたのですが、少し難しかったため家の戸棚に仕舞い込んでいました。しかしヨハネの福音書五章のイエス様が三十八年間足なえで病んでいた人を癒やされた箇所は不思議と頭から離れず、イエス様が困っている人を助けて、立たせてく

ださる大いなる力を持ったお方であるという思いが心の片すみに残りました。私は人間(人格)教育を軽視した高校教育に強い反感を抱いていました。

高校を卒業して横須賀にある防衛大学校に入学しました。しかし規則正しい生活も人の心を新しくすることができないと分かってきて、ニーチェの無神論に関する本、禅の本などの他に、パスカルの『冥想録めいそうろく』を読んだりして、心を満たしてくれる本物の教えを探し求めています。大学の図書館で、アメリカのクリスチャン女性作家キャサリン・マーシャルが書いた『愛はいずこに』と題された本と出会いました。人生の色々な試練に遭った人たちが、信仰の祈りによっていかに立ち直っていたかという具体例をもとに、信仰のあり方について書かれた本でした。涙が止まらなくなるほど感動しました。実家に戻った時に、ギデオン協会の聖書を取り出して再び読み始めたのですが、なかなか理解できず、その内にアメリカの有名な大衆伝道者のビリーグ

ラハムが武道館にやって来て、伝道大会が開かれることを新聞で知りました。どうしても参加してみたいと思うようになり、無断外出して、ちょうどそのころ東京にいた中学時代の友だちの所に転がり込み、そこから武道館へ通いました。講壇の後ろに聖句の「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(ヨハネ14:6)と書かれた垂れ幕がかかっており、求道中の私は強く引きつけられました。メッセージの内容は、クリスチャンに対する迫害と憎しみに燃えていたサウロ(後のパウロ)が復活したイエス様と出会い信じたことによって、いかに勇敢な神の愛の人に変えられたかを力強く説くものでした。最後の招きの時、人に押されてでなく何か霊的な力に押されるようにして前に出て、イエス様を信じ受け入れました。その時に聖霊の光を受けて心は強く新しくされました。

その後すぐに防大を退学し、兄の長女がいたこともあり、西宮に住みました。そこで単立バプテストの小さ

な教会を見つけ出し、十年ほど通いました。その後近くにあった「単立キリスト連盟」の教会に移り、そこでも十年ほど過ごしました。その間に、あるアイルランドの説教者が書いた『モーセ五書講義』という本を読んで大変感銘を受けました。特に創世記のヨセフ物語は、再臨のキリストのひな型として解説され、感動し涙なしでは読めませんでした。その後もっと聖書を学んでみたいという思いが起こり、もともと牧師になるつもりはなかったことから少し問題になりましたが、明石市にある単立バプテストの神学校に何とか入学を許可され、三年間学びました。卒業の時、「主の奇跡について」の論文を書いて卒業しました。しばらく教会関係の仕事を手伝っていましたが、経済的に成り立たないというところで、自然食品関係を扱う大阪愛農食品センターの流通部に就職しました。車に乗ることが多く忙しい仕事でしたので毎朝よく祈って出かけました。物損事故は何回か起きましたが幸いにも人身事故からは守られ

を聖霊の確信を得て理解できるようになったことを感謝しています。

イエス様はエデンの園の封印を解かれた「いのちの木」の君としてこの地上へ来てくださり、十字架による贖いのみわざを成し遂げられたこと。その後、永遠の「いのちの木」の君となって復活して、信じる者に永遠のいのちを与え、神の国へと救い出してください。私たちの心の霊の目を開いて、神の栄光を仰ぎ、聖霊の恵みによる天からの豊かな霊的祝福に与かることができるようにしてください。そして旧約聖書のルツ記のルツと新約聖書のベタニヤのマリヤの物語に象徴されるように、ルツがボアズを、そしてマリヤがイエス様をそれぞれ自分の贖い主として仰ぎ、ルツが落ち穂拾いを通して、マリヤが高価なナルドの香油注ぎを通して、各々がへりくだり、すべてをゆだねて真摯に仕えて行った時に賞賛を得て福音が伝えられ、世界中の信者に時代を超えて美しい愛と信仰の物語として

たことを感謝しています。

キリスト集会との出会いは、大阪のキリスト教書店でみつけた集会の証し集『光よあれ』や、若くして天に召されたリンデさんのことが書かれた『実を結ぶ命』などを読み、大変感動したことがきっかけでした。その後、教会の友人の紹介を受けて神戸キリスト集会に集うようになりました。それは神戸集会ができて二年目ぐらいのころでした。固定されがちな教会制度の下ではなく、聖霊の自由な導きと働きの中で、皆が主を力強く賛美し熱心に祈り、家庭集会で多くの人たちが集まり、神のみことばが生き生きと証しされ、交わっているのを見て大変驚き感動しました。また各地で持たれている喜びの集いに参加して、多くの兄弟姉妹と交わりを持つことで、神のみことばの生きた証しに接したり、各地での楽しい交わり会に参加できた事も大きな喜びでした。そして何よりも集会に来て、次のような聖書の真理

覚えられてきていること。イエス様はヨハネの福音書一章で漁師のシモン・ペテロに目を留め三年余りに渡って導かれ、二十一章では復活の永遠のいのちの中に救い出して、復活の牧場の園で羊飼いの愛のみわざのくびきを、とこしえに共にしていく栄光の教会の象徴的存在として迎え入れて、キリストのからだ(教会)を構成していく信者の模範として限らない栄光と救いの未来へと進ませてくださったことなどです。

さらに週末にフェリーで瀬戸内海を何度か往復して、別府市の病院に入院していた母を見舞い、聖霊の導きと働きの中で母が主イエス様を信じ、救いを確信できたことは喜びでした。

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っ

ていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損
と思っています。…
(ピリピ 3・7、8)

ここでパウロがなした証しは、私にとっても全くその
とおりであると思っています。この世にあっては恵ま
れた者ではありませんが、どのような境遇にあっても聖
霊の恵みによるいやしと潔めと満たしに与^{あずか}っていくこ
とが、主との平安で幸いな交わりに入れる秘訣^{ひけつ}である
と体験的に知ることができ感謝です。

乏しいからこう言うものではありません。私は、どんな
境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、
貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道
も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、
富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処す
る秘訣^{ひけつ}を心得ています。私は、私を強くしてくださる
方によって、どんなことでもできるのです。

(ピリピ 4・11～13)

神戸集会は阪神淡路大震災によって一時的に集会場
所を失いましたが、兄弟姉妹の熱心な祈り求めによっ
て芦屋の素晴らしい場所に集会の会堂が与えられ、自
由に存分に主を賛美し祈り証しできていることを心か
ら感謝しています。これからも聖霊の望みの光の中で
主の再臨、小羊の婚宴、千年王国、新しい天と地へと限
りない栄光の救いの未来に向かって進んで行くことが
できる幸いを思っ心は躍^{おど}ります。正に「彼(主)に信頼
する者は、失望させられることがない。」(ローマ10・11後
半)と書かれてあるとおりです。ハレルヤ！アーメン！

矢野 一美(やのかずみ)

大分県国東市朝来^{あさき}小学校、中学校、県立杵築^{きづき}高等学校、
防衛大学校中退、関西単立バプテスト神学校、大阪愛
農食品センター勤務

現在、聖書研究(ライフワーク)



いつも共にいてくださるイエス様

富田 幸子



ご主人の晃さんと

私は、二〇二三年古希を迎えました。あつという間の七十年でした。イエス様との出会いは約四十年前。なぜ私のような、取るに足りない者を選んでくださったのか今も分かりませんが、いつも共にいてくださり歩んでくださいましたことを心から感謝しています。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。
(ヨハネ 15・16)

イエス様との出会い

私は一九五三年九月、埼玉県幸手市^{さいって}で生まれました。五人兄弟の末っ子、それも私だけ年が離れていたため、随分甘やかされて育ちました。そのためか、内弁慶^{うちべんけい}で引っ込み思案、消極的で人のうしろについていくのが大好き。困った時は、誰かが何とかしてくれると思っていて、そのような性格が今も残っているような気が

します。

家族や親類、友達にも聖書を信じている人は一人もいませんでしたので、まさか私がイエス様を信じるようになるとは思ってもいない事でした。

きっかけは、横浜の社宅に住んでいた時、集会に誘われ参加したことでした。その頃、社宅には三家族が吉祥寺キリスト集会に導かれていました。初めて集わせていただいた時は、皆さんが「神さま。イエス様」と嬉しそうにお話する様子やお祈りする様子に、私は、「この人たちは、なんて純粹で子どものような心を持っている人たちなのだろう」とびっくりしました。私にはもう子どものような心は残っていないし、結婚生活を通じて自分の心の中には、みにくいものがいっぱいあると何度も気づかされていましたので、私とは別の世界の人たちだと思いました。それでもなぜか家族で誘われるまま集い続けました。礼拝や軽井沢のバイブル・キャンプにも行きました。

何度か礼拝に集っていたある日、突然心の中で子育てへの考えが百八十度変わる思いが与えられました。誰かから言われたわけでもなく、静かに礼拝に参加していた時でしたので、本当に驚きました。育児書を読んだりしながら、子育ては親の責任と思ひ込み自分なりに頑張っていましたので、気持ちがとても楽になりました。これは、神様からだ、と思いました。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。
(イザヤ 55・8、9)

その後、聖書の中にこの世の価値観と逆の聖句がたくさんあることにも驚きました。自分の価値観で人を裁いたり^{まじはす}的外れな生活を送っていたりしていたことが

7人の証し

Unser Herr lebt

分かり、私は、人を裁けるような者ではなかったと思わ
せていただきました。また、次のみことばも与えられま
した。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳
が遠くて、聞こえないのではない。あなたの咎^{とが}が、あな
たがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたが
たの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにし
たのだ。

(イザヤ 59・1、2)

私のかたくなな自我が隔てとなって、イエス様の救い
を妨げていたことに気づきました。そういう者のために
イエス様が十字架に架かってくださったと信じること
ができました。イエス様の愛に感謝しかありません。

洗礼を勧められた時は、私にはまだ早すぎると思い
ました。そのように躊躇^{ちゅうちよ}していた時、ベックさんが、「い
い人になってから洗礼を受けようと思っていたら、一生

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩
みを確かなものにするのは主である。(箴言 16・9)

自分の思いとは違う悲しい転勤でした。それでも、横
浜社宅で一緒にあった姉妹が、実家の新潟に帰省する
と交わりに来てくださいました。また、キャンプにも参
加できました。夫婦がイエス様を信じ、救われたのは、
このためだったのだと思われました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨て
ない。(ヘブル 13・5)

このみことばの通り、イエス様が決して見捨てずに
いてくださいました。

主人の試練

一九九五年の年末、三年前から東京に単身赴任して

受けられないよ」とおっしゃっているのを聞き、また、あ
る姉妹から「自分は以前と全然変わっていないと思っ
ているかも知れないけど、以前と同じように夫婦喧嘩
しても、今は悔い改めるようになったでしょう。それは、
イエス様がしてくださったからでしょう」と言われ、洗
礼を受ける決心をしました。夫婦一緒にしました。私たち我^{わが}
儘な夫婦のためにお祈りくださった兄弟姉妹に感謝で
す。ベックさんのおっしゃったとおり、いい人になって
からというのでは、未だに洗礼にあずかっていないで
しょう。

八月に受洗、翌年の春に新潟への転勤が決まりま
した。

「何故、生まれたばかりの乳飲み子のような私たちが、
こんなに早くに群れから離されるのだろう」と、とても
悲しかったです。まだまだ、その群れの中でイエス様の
ことをよりよく知りたいと思っていました。その頃は、
新潟には集会がありませんでしたから。

いた主人が、別人のように元気のない姿で帰ってきま
した。以前にも眠れなくなったり悩み過ぎたりと、落ち
込むことはありましたが、以前とは比べようもないく
らいひどいものでした。決断力がなくなり、じっと座っ
ていられずうろろ家の中を歩き回っていたかと思う
と、壁に向かってじっと立っていたり…。私は、あまり
の決断力のなさに、心配を通り越して腹を立てたりす
る、全く愛のない者でした。私の中には、自分勝手な愛
しかないのだ、と改めて思い知らされました。

また、この試練は、主の私への懲らしめだと思いまし
た。なぜなら、まだ小学生だった子ども二人との単身生
活はとても楽で、大きな問題もなく、私の弱い信仰はま
すます弱くなっていたからでした。こんな私をイエス
様は悲しんでいるだろうな、という思いがあっても、イ
エス様を見上げる気持ちがなくなっていました。そう
いう者をイエス様は、放っておかれませんでした。

7人の証し

Unser Herr lebt

そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしてくださいと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。

(ローマ 8・23、24)

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。(詩篇 37・24)

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それかなえてくださいます。(マタイ 18・19)

一年後には、姉妹とお子さんたちも新潟に來られたので、家庭集會を開いたり、たくさんの方の交わりを持つことができ、本当に感謝でした。

以前の主人の元氣さは、自分に自信がありその上イエス様もいてくださるから、自分は何も怖くないという元氣さでしたが、その後の元氣さは、もう自分には全く自信は持てないけど、イエス様がいてくださり、兄弟姉妹もいてくれるので自分は大丈夫という元氣さに変わりました。その元氣さは、私にも嬉しいものでした。

最近の出来事

二年前の六月、私は車でおおきな自損事故を起こしました。道幅も広く車のあまり通らない場所での出来事で、ぶつかった瞬間は訳が分かりませんでした。車は

辛い日々でしたが、その中にもイエス様の愛を感じる事ができました。兄弟姉妹に祈っていただき、みことばも与えていただきました。年末年始後、一週間会社には行けませんでした。それでも、なんとかイエス様の憐れみで行ける力を与えていただき、春には新潟への転勤が決まり、自宅へ帰って来ました。キャンプに行くと少し元氣になりましたが、また元氣のない生活に戻り、それが年ほど過ぎた時、横浜の社宅で一緒で、今は芦屋キリスト集會に集っておられる兄弟が新潟に転勤で来られました。兄弟が來られると、主人はあつという間に元氣を取り戻しました。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。(伝道者 4・9)

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一

大破しましたが怪我もなく、何より人身事故でなかったことに主の憐れみを思い感謝しました。

もともと運転が苦手でしたので、次の免許更新の時には免許返納しようと考えていましたが、主の御計画は今運転をやめなさい、ということなのだと思い車を処分しました。新潟での車のない生活はやや不便ですが、これが最善と思っています。

また、その年の十一月から翌年三月までに三回ぎっくり腰になりました。もともと腰痛持ちで、三十代にぎっくり腰を経験してから何度かあったのですが、こんなに頻繁にそれも痛さも治りの遅さも今までと比べようがないくらいひどいものでした。ほとんど家の中での生活で、時にはつぶやくような者でした。その時思わされたのは、普通に動けることの幸せ、そして、目に見えないけれども体の中も確実に老いているという事でした。

7人の証し

Unser Herr lebt

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(2コリント 12・9)

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。

(エレミヤ 10・23)

今は、掃除機をかける家事は主人がしてくれています。また、完全退職後は、共に祈る時も増えました。主が少しずつささえ合う夫婦へと変えてくださっています。

子供たちは、イエス様を知っていますが、大きくなるにつれ集会に行かなくなり、まだイエス様を受け入れておられない方と結婚しました。たまに「祈って」と言わ

れますので、心の中にイエス様がいてくださるのだと嬉しくなります。

主人と私の親族、そして子供たちの結婚相手の両親は、私たちの信仰を反対はしませんが、先祖からの宗教を守っています。家族の救いは約束ですが、イエス様を信じることによって、早く重荷を下ろせたらと祈っています。言葉足らずで上手くイエス様を伝えられない者ですが、永遠に変わらない真理のみことばには力があり、生きて働いてくださると信じられますので感謝です。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイ 11・28)

富田 幸子 (とみた さちこ)

一九五三年九月 埼玉県幸手市生まれ

埼玉県立春日部女子高等学校、埼玉大学教育学部卒

夫 晃 (あきら)

長男 堯 (たかし)、妻 弥生 (やよい)、孫 百華 (ももか)

長女 羽深 理恵 (はぶかりえ) 夫 羽深 将人 (はぶかまさと)

孫 紗羅 (さら)、颯真 (そうま)、伶菜 (れいな)



主に導かれて、日々祈りつつ

宮路清正



清正さん

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。(1テサロニケ5・16〜18)

どなたかの証しの中でこの聖句が読まれ、強く印象に残り、その後は、ことあるごとに思い出しています。この聖句が、私に大きな指針を与えてくれたような気がしています。

生い立ち

私は、一九五〇年一月に熊本県の農家に三男として生まれました。両親は、仏教徒で地域の神社や寺の役員などを引き受け、自宅を開放して、僧侶の講話を聴く会などを行うほど熱心でした。当時、小学生だった私も、そのような話を聞くのは嫌いではなかったので、参加される方のために座布団やお茶を配ったりして手伝い、講話も最前列で聞くようにしていました。

小学生のころは、読書が好きで学校の図書室に入り

浸り、偉人伝などの本を次々に手に取って読みふけていました。ある日の放課後、偉人伝の中にあつた「キリスト」の本を読んでいると、読み進む内に外は雨が降り出して、雷が鳴り始めました。私は本の内容と、現実の雨や雷がつながっているような不思議な感覚になり、そのまま読み終わるまでそこにいたことを、六十年以上経った今でもはっきりと覚えています。

父は、私が生まれる前に戦争で徴兵され、満州に渡り、母は幼児だった兄と、父が不在の間、多くの田畑を守つたと、戦後に何度も聞きました。戦後、シベリア抑留から帰還した父は、戦争の話はほとんどせず、時折、満州の寒さが凄かったことだけを聞いたように思います。

兄が中学卒業後に自宅の農家を継いでいましたので、私は自力で就職し、新しい家庭を自分で築く必要を子どもなりに考えていたようです。小学校卒業直後の春休みに、中学校卒で入れる自衛隊の制度があると聞いて、私は、それが自分の今の成績と体力で何とか生活で

きる道だと考え、その時点で進路を決めました。

私の人生計画と青春の日々

一九七〇年、二十歳の時、陸上自衛隊で八人の部下を持ち、その時点での私の人生計画は、孔子の論語になぞらえて「十五で学を志し、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る…」と、心密かに目標を定めました。現実には二十四歳で結婚し、二十八歳で長男が誕生、そこで思うことがあつて、自衛隊を退職し、知人やその「伝手」などを頼っていったところ、隣の諫早市に開設されたばかりの「国立少年自然の家」で、子どもたちに野外活動を教える仕事を与えられました。

そして、三十二歳の時に二人目の子も無事誕生し、私も仕事に邁進せねばと思い始めた頃、ある出来事がきっかけで、妻が独身時代に東京に居て吉祥寺キリスト集会のベック兄から洗礼を受けていたことを知りました。その時は大変驚き、すぐに批判しかけましたが、

7人の証し

Unser Herr lebt

子どもたちの前で口論することは避け、ベック兄のことで、キリスト教などについて図書館で密かに調べたりしました。しかし、簡単には納得のいく答えが見つからず、妻の提案で東京に家族皆で行き、ベック兄に直接会うことになりました。

そこで、私は妻から指摘されていた私の改善すべきことをベック兄に会って、直接、その真意を聞いたですつもりでした。例えば、「少年自然の家」の仕事は、日曜にも仕事があるので、主に喜ばれない仕事だと妻から言われているが、本当にそうなのか、また聖書に書かれていることは、すべてその通りにしなければいけないのかなど。

ベック兄は即座に「全然、問題ないよ」と笑顔で答えられ、聖書に書いてあることは、人間が傲慢（*しやうまん*）にならないように、自分だけの判断でなく、身を低くして謙虚に神の声に従うことの必要性和重大さだと話されました。別室で二人きりでそのことを聞いた私は、ベック兄に

くに住む友人、知人の娘、更には公的な家政婦を頼み、また、私自身も一か月ほど休暇をもらって対応しました。今、思うと、皆さんがすぐに手伝ってください、これは私だけの力ではなかったと、主の力を感じます。

数か月して妻は退院しましたが、退院するとすぐに、病院から処方された薬も飲まなくなりました。そのほかにも私は妻を正（*ただ*）したいと思うことがいくつもありませんでしたが、まずは病気への対応が第一と思い、言われるままにしておきました。その後、約三十五年間、妻は数か月や半年程度の間隔で入院や退院を繰り返しました。妻の入院中は、熊本県に住む私や妻の両親が連絡を取り合って、交代でやってきて家事や子守りなどを手伝ってくれましたし、子どもたちも近くの保育園に預けることができました。その内に二人の子どもも成長し、家事の一部なども手伝ってくれるようになりました。

励まされた感じで、そうしたお話しに胸をなでおろしました。

その後に参加した集会では、皆さんと共に聖歌を歌いながら、今までのことが思い出されて涙がこぼれ、止まらないほどでした。

子育てに明け暮れながらも模索の日々

それからの日々、妻は聖書の言葉を自分なりに解釈して次々に行動に移しました。

その間、私は妻の行動にどう対処していくべきか、全く見当もつきませんでしたから、ただひたすらに「助けてください、助けてください」と、両手を合わせて祈りました。数日して、このままでは私は妻と一緒に生活するのは無理だと判断し、妻を入院させました。

しかし、妻を急入院させたので炊事洗濯だけでなく、二人の子どもの世話まで私が負うこととなりました。仕事をしながらの私が一人でできるはずもなく、近

しかながら、両親たちもそれぞれの実家の用事があるために、間断なく来ることができなくなり、その間は父子三人で協力し合いながら、生活ができる程度までに何とか家事をこなせるようになりました。私自身も、職場の食堂から残り物のおかずを、有料でタッパーに入れてもらって持ち帰り、帰宅後すぐに夕食を食べられるようにしたり、職場の人事担当と調整し、特別に残業や宿直を外してもらったりして、周囲の方々に手伝ってもらいました。

その頃は、経済的にも妻の入院治療費や家政婦へのお礼、その上に生活費のことで、私の給料の三倍ぐらいの金額を毎月出費していました。それでも、まずは私自身が病気をせず、交通事故を起こさぬようにと、自分のことで必死でしたが、今にして思えば、多くの方に支えられていたと感じます。ベック兄にも雪の降る寒い日に、我が家まで足を運んでもらったり、そのころは長崎に集会がまだなかったので、東京から主にある兄弟姉

妹が我が家まで来てくれて手伝ってくれたり、話を聞いてくれたりと、多くのサポートにより助けてもらったことが思い出されます。

聖書との出会い

一九八五年五月、私は何回目かの軽井沢のバイブルキャンプに参加して、キャンプ終了後に主にある姉妹の別荘で洗礼を受けました。その後も、何度か東京に行く度に、ベック兄宅だけでなく、近くに住む主にある兄弟宅にも泊めてもらい、更には私が仕事で東京に行く用事があるときも、何度か泊めてもらい、主にある交わりの時を共有させてもらいました。

また、キリスト集会の証し集『光よあれ』をはじめ、『なにもものも私たちを神の愛から引き離すことはできない——ローマ人への手紙』『絶えず祈れ』『実を結ぶ命』と、次々に聖書の学びの本を手にとって読みました。聖書そのものは難しいこともありましたが、これらの本

は、初心者私にもわかりやすく書かれていて、読みやすかったので、手にするとすぐにむさぼるように読んでいました。

二人の子どもたちが、それぞれに成長し、学校に行くようになる、福岡キリスト集会や大牟田キリスト集会、日程が合えば東京の吉祥寺キリスト集会まで行き、礼拝や喜びの集いなどにも参加しました。そこでのメッセージや交わりを通して、私自身も聖書に書いてあることの意味や、実生活での課題を聖書ではどのように書いてあるのかなども教えてもらい、私の中で少しずつではありますが、人生が落ち着きつつあるように感じました。

祈りの日々

妻は、退院後はすぐに薬を飲むのをやめ、ふたたび思いがけない行動をしました。

しかし、主は私や子どもたちの健康を守り、子ども

たちの成長も支えてくれました。私は、妻の言動にどう

対処したらいいのか、分からない時、絶えず祈りました。出勤途中の車の中でも何度も何度も。途中の信号が赤になると、これ幸いとすぐに祈ります。祈る途中で雑念が出て、あれこれ対策や対応の選択肢が頭に浮かんで、祈りが先に進めなくなると、もう一度、初めから祈り直します。何度も繰り返し返してやっとな、祈りに集中できた頃には心が落ち着いてきて、主にゆだねる気持ちになり、仕事もできるようになっていました。

いつでもどこでも祈り始めると、それまでいろいろな悩みで夜に眠れないことがあったのが、祈ることで眠れるようになりました。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるよ

うに、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

この聖句に出会い、主は本当に心優しく愛に包まれた方であると感じました。

私は、妻が長い間、入退院を繰り返すうちに、子どもたちの心に傷を残すのではないかと心配していました。しかし、主が子どものことを心配してくれていると思うと、不安がなくなり、普段通りいろんなことに対応でき、心から感謝できました。そのおかげで、私は子どもを一週間程度、実家の親に自宅で見てもらって、ヨーロッパ研修に行き、あるいは息子のみを自宅で実父に見てもらって、娘とともにフィリピンやインドに行ったりできました。それはこの主の御約束があったからだと思えます。それまでの私だったら、子どものことが気になって、何もできなかったと思うからです。

また、子どもが大好きな私ですが、最初の二人は流産

し、その後の二人も妊娠が判明したら妻はすぐに入院し、数か月間、流産しないようにベッドから起き上がることもできず、出産まで絶対安静状態でした。出産後、妻は衰弱した体で起き上がることにさえ難しいので、私が妻に教わりながらミルクを調合、洗濯や調理はもちろん、保育園に通う上の子の遊び相手もしなければなりません。まさに体が幾つあっても足りない状況で、当時は今みたいに紙おむつもないので、毎朝、山と積まれたおむつを早起きして洗って、それを干し終わると、朝食の調理に取り掛かる毎日で、子どもを送り出して職場に着く頃には思わずため息が出ました。

でも、その経験があつたからこそ、今、「森のようちえん」で二歳から六歳までの子どもたちに囲まれて、思いつきり遊べるし、お母さん方とも育児の苦労話などの話ができるし、子どもたちの成長を喜び合うことができます。今にして思えば、私のことを配慮して、主は私にできることを準備してくれていたようで、まさに感謝

しかありません。

そういえば、私は中学二年生になるまで夜尿症が治らず、^{きつおん}吃音もあったので両親は私に神社でお祓い^{はら}いを受けさせる一方、電波治療みたいな機械を、背中などに押し当てて治療を試みていました。何とか私を普通の子どもにしたいと、両親は必死になっていたように思います。

そんな私が七十代の老人になった今、「森のようちえん」で子どもたちに囲まれて楽しい時間を過ごせているのは、一方的な主の恵みと思わざるを得ません。私の今の喜びは、すべて主の計らいで得られたことによるものです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

いつも喜んでいたい、絶えず祈る者でありたい、すべてを感謝しながら生きていきたいと思うのです。

他にも主のみわざだと確信できる例が沢山あります。

私と息子は、一九八八年に息子の十歳の記念に富士山に登りました。その時に、水筒を山頂に忘れて下山してしまいました。でも、気づいたのが下山してからだったので、そのままにして諦めていました。それから三十年後の二〇一八年に、息子が入院して沈んでいた時に、二人だけの病室で私とその話を思い出したので、「水筒をいつか取りに行かなくてはね」と話すと、それまで沈んでいた息子が大笑いして、「もう、あるわけないよ、三十年も前の話だよ」と言ったのです。息子が入院以来、沈んでいたのに突然笑い出したので、病棟の看護師さんらもびっくりしていました。私は、息子の反応に驚きながらも、主に感謝しました。忘れるという行為は、人間が意図的にできることではないので、山頂に水筒を忘

れたことは、三十年先のこのことのために主が計画されたことかと思うと、こんなにまで主の計らいは完璧なのかと本当に驚きました。その後の息子は、気持ちが高向きになり、快方に向かって治療ができるようになったのです。

また、洗礼を受ける前からの話ですが、私は一九七八年にろうあ者から手話を学び、その当時、大村市に手話サークルがなかったので、仲間と協力して手話サークルを設立しました。それから三十年以上経った頃に、私の聴覚が次第に衰えて来ました。通常なら、私は間違はなく落ち込んでしまったことでしょうが、それまで付き合ったろうあ者の方たちが素晴らしい生き様をされていることに大変励まされてきた私は、それほど落ち込むことなく、ろうあ者に学ぶ者として謙虚な気持ちで補聴器をつけて、今まで通りに生活しています。

もちろん、私の聴覚の衰えに気づいた仲間が手話通訳してくれる場面も多くありますし、家で一人暮らし

私は、水道の水を止め忘れて、夕方に帰宅してビックリすることは、一度ならず、何度もありました。でも、そのことで落ち込むのではなく、そのことからもうあ者の苦労を体験的に理解できるチャンスになったことを喜べたのです。全ては、主の愛の深さに驚き、感謝する毎日です。

今、妻は二〇二二年に老人ホームに入ったので私は一人暮らしです。

朝食を初め、昼食、夕食の度に祈ることは、「今日も私のために、食事を準備してくださったことを感謝します。そして、世界中には毎回の食事が与えられない子どもも沢山いますが、その中の一人一人を、あなたの愛で包んでください、御心ならば、彼等に食事が届きますように」と祈ります。

海外の貧しい子どもを支える活動は、一九八二年に娘が生まれた喜びを何らかの形で還元したいと思って始めた精神里親活動です。この活動は、私の働き甲斐や

生き甲斐にもつながり、むしろ支えてもらっているのは私の方こそと思います。

世界で戦争が続いている昨今、海外の紛争を単に外国の事件としてではなく、かわいい里子が暮らしている地域に爆弾が落とされることを容易に想像できるので、簡単に支援を止めるわけにはいかないのです。父親がシベリアから苦勞して日本に帰還できて、私が生まれました。私の命は、主に守られて今があることを忘れてはならないと思うのです。

その他にも、冬の朝に食事を作る時、水道から出る水は氷のように冷たく感じられますが、しばらくすると、水もぬるく感じられ、朝食を作れます。トイレの便座も、座った瞬間は冷たく感じられますが、その内にそれも耐えられないほどではなくなってきました。などなど、一日のうちでも多くの機会に主に感謝しながら喜びながら祈ることができます。

宮路 清正（みやじしんせい）

一九五〇年（昭和二十五年）一月、熊本県生まれ

菱形小学校、鹿南中学校、玉名高等学校中退、陸上自衛隊入隊、一九七八年 依願退職

「国立諫早少年自然の家」、長崎大学等に勤務、二〇一〇年定年退職。「森のようちえんinおおむら」（自主保育グループ）を立ち上げ、指導スタッフとして継続中。また、仲間と二〇一五年に「おおむら里山村プレーパーク」を立ち上げ、子どもの自然遊びを推進する活動を実施中。

妻 久代

長男 正仁（まさひと）、長女 千代

みことばのとおり

詩篇119篇

丸茂栄里子



栄里子さん(中央)、ご主人の哲明さん(左)と

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

(詩篇 138・8)

子供の頃から結婚するまで

私は一九七三年、父佐藤嘉純^{よしずみ}と母陽子のもとに次女として生まれました。両親、三歳上の姉と四人家族で、横浜市で育ちました。母が学生時代の友人を通して集会へ導かれ、私も幼稚園の頃から母に連れられて、姉と一緒に吉祥寺キリスト集会の日曜学校へ集うようになりました。

それから間もなく家で車を購入すると、まだイエス様を信じてなかった父が毎週日曜日、家族を集会へ連れていってくれました。毎週日曜日、日曜学校へ行き、母たちが礼拝と福音集会に出ている間は近くの公園で

集会のお友達と一緒に遊んで、集会でスープとパンのお昼を食べて家に帰る。この流れがいつものパターンでした。

年に数回開かれた軽井沢のバイブル・キャンプも楽しい思い出です。小さい時からイエス様は身近な存在でしたので、自然にイエス様を信じていました。お願い事、困った事、心配事など何でもイエス様にお祈りしました。窮地に追い込まれた時には、母と一緒に祈りをしました。幼い頃からイエス様は私にとって必要な方でした。

小学校六年生のことです。なぜか担任の先生に「佐藤さん、君はクリスチャンなの？」と訊かれました。私はみんなと違うと思われるのが恐くて、「そんなんじゃないりません」と答えてしまいました。その学校の帰りにとっても落ち込みました。次のみことばを知っていたからです。

ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。(マタイ 10・32、33)

「イエスさま、ごめんなさい。そんなじゃないって言うってごめんなさい。イエスさま、私を知らない、と言わないでください」と心の中で何度も言いながら帰りました。家に着いて母親に話しました。母は「イエスさまにごめんなさい、と言った事はもう赦^{ゆる}してくださいって忘れてくださるのよ」と話してくれました。それでも私は確信がもてず、「そんな気がしないけれど…」と話す、母に「もう赦してくださいってあるけれど、心配がでくるなら、その度にごめんなさい、とお祈りしたらいいよ」と言われました。そしてその様にしました。

7人の証し

Unser Herr lebt

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ1・9)

その後、小学校を卒業してからも、その先生とは年賀状のやりとりでつながっていました。それから十数年後、先生は私の結婚式に御代田の国際福音センターまで来てくださいました。六年生の時は、「イエス様を信じている」と言えなかったのですが、イエス様はこの様にしてくださいました。

中学生から高校生ぐらいになると、「自分は本当に救われているのだろうか？　そもそもイエスさまを信じるとはどういう事なのか？」と考えるようになりました。

短大二年生の二月、あと少しで社会人になるという時に、九州の大牟田でバイブル・キャンプがありました。もうすぐ学生生活も終わるし、九州は行った事がないから行ってみようかな、という思いになり、近所の姉

妹と一緒に参加しました。当時は、日曜日の礼拝には行っていました。が、キャンプなどには行っていませんでした。また行きたいとも思っていなかったのです、なぜそういう気持ちになったのか、イエス様の導きだったと思います。

最初の夜の集会で、ある兄弟が「救われて嬉しい！」と喜びの証しをしてくださいました。証しの中で「東京駅の道の真ん中で『ケンケンバー』をしたいぐらい嬉しい！」と話されていました。衝撃的でした。私には喜びがない。私も喜びが欲しい、と思いました。またそれと同時に、喜びがないのは、やはり救われていないのではないか。という、前から考えていた疑問も再び心の前面に出てきました。宿泊した部屋の姉妹方との祈り会で、「喜びがほしい」と打ち明けると、姉妹に、「喜びをください！　とそのまます祈りすればいいのよ」と言われましたので、その様に祈りましたが、喜びはよく分かりませんでした。とうとう最後の夜になり、このまま帰るの

かな、と残念な気持ちで交わりの席に着いていた時に、思いがけない導きとお交わりが与えられました。それは、今交際している彼とのお付き合いはイエス様のみここではない、というものでした。(その彼は今の主人です)

次の日の朝、ベック兄とお交わりが与えられました。そしてイエス様のみところが何であるか、はっきりと受け取ることができました。また心の中にあつた疑問もベック兄に話しました。「私にはあの兄弟のような喜びがありません。私は本当に救われているのですか？」と聞きました。するとベック兄は聖書を開いて、「『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』(ヘブル13・5)とイエス様が言っているから救われているんだよ。感情ではないよ。イエス様は嘘つきじゃないよ」と、また「喜びは人それぞれの性格もあるから、それほど気にしなくてもいいよ」と話してくれました。そのお交わりの後、礼拝で歌った『キリストにはか

えられません』の賛美が心にしみて涙が溢れました。

帰りは何か重荷がとれたような。上手く表現できませんが、行きとは全く違う何か新しい心が与えられていました。家に帰ってすぐ、ベック兄が勧めてくれたように、彼には手紙を書きました。後に彼も救われて結婚へ導かれました。私がキャンプへ行っている間、母の祈り会の方々が私の事を祈ってくれていたと後で聞きました。

結婚してから

主人の哲明兄は、家族を大切に思ってくれています。子供は四人与えられました。子供達は兄弟姉妹にかわいがっていただき、祈っていただき、その中で育ちました。この大きな恵みに心から感謝しています。今はすでに四人とも成人して、社会人になっています。

二十八年間の結婚生活の中では、つらい事や暗いトンネルの中にいる様な時もありました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・5、6)

このみことばを受け取った時は、たったひとつの光をもらったように思えました。主は、共に重荷を背負って祈ってくださいる姉妹も備えてくださいました。また主にあるアドバイスもいただきました。そのアドバイスは今日々の生活の中で生かされています。様々な出来事を通して、生きておられる主が、夫を通して家族を導いてくださることを経験しました。また「わたし(主)はあなたがた(私たち)のために立てている計画」というみことばも、「あとでわかるようになります」というみことばも、本当にその通りなのだと思いますことが少しずつ増えました。

した。そして子供は父親に話しましたが、答えは「部活へ行きなさい」でした。その夜、子供と二人で、キャンプへ行けるように、お父さんの気持ちをイエス様に変えてくださるようにとお祈りしました。子供は「ぼくはどうしてもキャンプへ行きたくなっちゃった。お父さんがダメって言うても、ぼくはキャンプへ行くとよ！」と言っています。私は「そんな事できないでしょ。今、もうイエス様にお祈りしたから、明日の朝、もう一度お父さんに聞いてみよう。そしてもし、『部活に行きなさい』だったら、部活へ行こう。」と話しました。

そして私はひとりで部屋に入って、主なるイエス様に祈りました。「イエス様、あなたは子どもたちを、わたしのところへ来させなさい。止めてはいけません。とおっしゃいました。子どもはあなたのところへ行きたいと言っています。イエス様、あなたはこの願いを拒まれますか? どうかみこころをなさってください。」

祈った後、部屋を出て一階へ降りると、主人が言いま

長男が中学二年生の夏のことです。私は夏の中高生バイブル・キャンプに家族みんなで参加したいと思っていましたが、子供の野球部の練習の日程と重なっていました。主人は部活を優先するべき、という考えをもっていました。そのため、私と子供達とでキャンプへ行けるようにと祈っていました。私は主人の気持ちが変わるように色々な方向から話してみました。が、変わる事はありませんでした。子どもも「キャンプへ行きたいけれど、お父さんが部活へ行きなさい、と言うし、部活へ行くよ」と言っていました。

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかりと立つて動かずにいよ。
(2歴代誌 20・17)

キャンプの二日前の夜、子供に集会のお友達からキャンプのお誘いの電話がかかってきました。子供はお友達の声を聞くと、とてもキャンプへ行きたくなりました。「みんなでキャンプへ行くと?」。私が頷くと、主人が続けて言いました。「もう子供には話した。寝ぼけていたけれど起こして、キャンプへ行きたいのか、と聞いたら、『うん』と言ったから、明日の練習の時、部活をお休みする事を先生に言ってください、と言ったよ」と。

人にはできないことが、神にはできるのです。

(ルカ 18・27)

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。

(ヨブ 42・2)

私はこの時、嬉しいという感情はあまりなく、ただ「主イエス様、私はあなたを恐れます」と少し緊張しながら祈りました。これほど主イエス様を間近に感じ、この様に祈ったのは初めてでした。

このことは長男はもとより子どもたちみんなが、主のみわざを見る経験となりました。

それから時は流れましたが、私は今も愚かな羊です。自分の思いや考え、言ったこと、したことを思う時、心が苦しく、悲しくなります。しかしそれをそのまま羊飼であるイエス様のところへ持っていくことが許されているので感謝します。

あなたがたの思い煩い^{わづら}を、いっさい神にゆだねなさい。
神があなたがたのことを心配してくださるからです。
(1ペテロ 5・7)

イエス様は「いっさい」と言ってくださいています。それゆえ、どんな小さなことにもイエス様は耳を傾けてくださいます。そして心を配ってくださいいます。感謝です。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

毎日の生活の中で、明るく楽しくおもしろく、励ましてくる主人や子どもたちに感謝しています。また両親、家族、友人知人の方々に、そしていつも祈り交わり支えてくださる兄弟姉妹に感謝しています。イエス様がいてくださるから感謝です。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
(2コリント 12・9)

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5・16～18)

丸茂栄里子 (まるも えりこ)

一九七三年二月十一生まれ

横浜市立東本郷小学校、私立調布中学校、高等学校、調布学園女子短期大学英語英文科卒業、株式会社荏原^{えはら}製作所 (勤務を経て結婚)



イエス・キリストに愛されて四十年

大塚二郎

私は、イエス・キリストと出会って、四十年になりました。

四十年の意味

聖書の出エジプト記では、神の命令によりモーセが率いたイスラエル人がカナンに到着するのに四十年かかっています。出発時と到着時の二十歳以上の兵役につける男の人口を比べるとわずかに減っています。それは、モーセが神から賜った、「十戒」を始めとする「律法」に従えなかったことと、「神への不満のつぶやき」に対して、神のさばきを受けたことを示しています。怒るのに遅く、恵み深い神様だったのですけれども、「律法」と「不満のつぶやき」に対しては、非常に厳しい神様でありました。

そして、今から二千年前に、神様が処女マリヤの胎を通して、この世に、人間と同じ姿をしたイエス・キリストを送ってこられました。イエス・キリストは、「神の



二郎さん(後列右)、ご家族と

子」ですから、「神」そのもので、全く罪のない方です。

私は、「この四十年間、罪のないイエス様から溺愛された」と言ってもよいかもしれません。最初に創造されたアダムとエバ以来、全人類は罪にまみれていましたが、イエス様は、律法ののろいを全部十字架で受けてくださったばかりか、イエス様を信じる者が、「ごめんなさい」と言うだけで、その罪を全部赦してくださる優しい神様です。私の四十年間を振り返ると「イエス様は、ほんとうに素晴らしい」としか言えません。

死線を越えて —— 兄弟姉妹の祈り ——

主と出会ってちょうど四十年目の昨年、主は私に大きな試練を与えてくださいました。四年前に妻を亡くした私は、食事も不十分で誤嚥性肺炎になり、意識を失い、救急車で病院に運ばれました。そして、私の入院の保証人、河合みずる姉(亡き妻の実の妹)は、主治医から次のように言われたそうです。「肺炎が重症であり、回

復が難しい」。さらに「酸素の数値が危険な値であり、いつ何が起こしても不思議でない」。そして、このような状態の中、木曜日のインターネット回線による祈り会で私の事が報じられ、全国の兄弟姉妹が私について「生きるにしても、死ぬにしても主の栄光があらわされるように」と祈ってくださいました。感謝せざるをえません。私は、その後もずっと意識不明で、三週間後にパッと目が覚めました。

しかし、現実には厳しく、私は点滴のチューブで体を縛られ、寝返りを打つことも出来ず、もちろん歩くことも出来なくなっていました。そして、おしめもしておりませんでした。そのような中で、徐々に回復するに従って、聖書を届けてもらい、むさぼるように読みました。一日五十ページを目標に読みました(実際は、なかなかそうはいきませんでした)。そうしたら、「聖書は、こんなに面白いものか」と思うほどでした。もう一回、信仰をやり

7人の証し

Unser Herr lebt

直そうという気持ちでいっぱいでした。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。
(エレミヤ 15・16)

ほんとうに、こういう感じでした。みことばが美味しかったのです。みことばを読むのが、楽しくて楽しくて仕方がなかったのです。合計四か月入院しておりましてけれども、歩けないし、肺炎で食物を飲み込むことも出来なかったの、リハビリに二か月を費やしました。実に辛いリハビリのおかげで何とか歩けるようになりました。しかし、今も体はガタガタで、遠州地方特有のからっ風が吹けば、飛ばされて転びますし、心臓も悪いので、いつ天に召されるかわからない状態です。

これから、私の一生でイエス様がいかに私をあわれん

でくださったかを述べさせていただきます。

私の青年期の計画

私は、一九四〇年に生まれましたが、「主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。」(イザヤ 49・1)、つまり、生まれる前から「二郎、二郎」と呼ばれていたということです。私が生まれて三年後に、父大塚一郎は脳出血で亡くなりました。敗戦間近でした。父が亡くなることによつて、母と私を含めて四人の兄弟姉妹(私は末っ子)が、家族一体となつて林を開墾し畑仕事をして、食を得ました。毎日食事は、さつまいもと、野に生えている草と、にわたりの卵です。何しろお金がない。だけど、ほんとうに四人の兄弟姉妹で協力しあつて、極貧生活を耐え忍びました。そういう中であつて、私は、公立の高校と大学へ行きました。大学は、奨学金とアルバイトで行きました。東大は落ちましたけれども、落ちた時に自分なりの計画を立てました。

「東京工業大学(現、東京科学大学)」に入ったら、サッ

カーを思いっきりやろう。卒業したら、中小企業に入つて、サラリーマンになつて、何か新しい『ものづくり』をやろう。それから、「三十歳までには、結婚しよう」という計画を立てました。私は、理工系の大学に行ったのですけれども、決して科学が万能だと考えていたのではなく、「真理」を探していました。大学三年生から四年生にかけて、朝晩座禅を組み、それから、80°Cのバイクで、四国のお遍路さん八十八箇所を巡り、「真理」を求めていました。

しかし、実際に四年生になった時に「サラリーマンになる」という計画は早くも崩れました。精密工学研究所で卒業研究を指導する教授から呼ばれて、「これからアメリカ製の大型ねじ研削盤が大学に来るから、君はそれをデジタル制御で十ミクロン精度可能なねじ研削盤に改造しなさい」ということでした。そこで同大の大学院に進むと、研究のためにいくつかの工業会の方が

返却なしのお金を出してくださいました。

私は、職人さんから、一年間、そのねじ研削盤を操作する指導を受けて、二年目からは本格的にねじ研削盤を高精度化すると共に、デジタル化するための研究に入りました。そして、最短期間の五年間でこれを成し遂げました。この機械は、実用化が可能になつて長尺(一〜三メートル)のボールねじを研削するために大量に使われました。私は、知らず知らずのうちに高慢の階段を上っていたことに気がつきませんでした。

結婚

結婚については、何人かの見合い相手の中から、椎葉玲子さんを選びました。浜松のホテルでお見合いをし、そして、浜名湖の岸辺を散策した時、彼女は高校時代にハンドボールをやつていて、足が早くて得点王だったこと、運動神経がすごく良いということがわかりました。そして「これから、私の家に来ませんか」と誘われ

て、なんとなく掛川の彼女の実家へ行きました。彼女の家の庭には、小さな鉄工所が建てられており、そこでカワサキのオートバイ用のマフラーを作っていました。私は、十八歳の時からの「音キチ」(バイク好き)で、カワサキのオートバイには取り分け興味を持っていましたので、これは驚きでした。

それから、十か月交際の後、一九七十年、大阪万博の年に結婚しました。彼女は、身を粉にしてとてもよく働き、短気で神経質な私とは反対でおおらかで、明るく、母親ともうまくやってくれました、また、料理をするのが好きで、味も良く、今考えてみると、私はほんとうに良い嫁さんに出会ったと思います。

主のご計画

——薬物依存症からイエス・キリスト依存へ——

それまでは、自分の力で走り続けてきましたが、主のご計画が、はつきりと現われてきました。私は、薬物依

存症になりました。元々、お酒が強かったのですけれども、「お酒」が「睡眠薬」に代わり、それが少しずつ増えていきました。とくに、結婚してから薬の量が増え、増えて、メロメロに酔っぱらって暴れだすようになり、妻の玲子をはじめ、子どもたちを、どんなに傷つけたことか。

それでも、玲子は精神病院を見つけてきて、四度も入院をさせてくれました。二回目の入院の時は、心臓が止まり、玲子がすぐに近くの医者を呼んで、心臓マッサージにより、生き返りました。その退院後、一年でダメになつてしまい、四回目はさすがに、私自ら一人で病院に行き、入院しました。

入院してすぐに看護師で当集会に集われるMさんから声をかけられました。後になって彼女が吉祥寺キリスト集会に集っているということを知りました。その病棟では、宗教活動は禁止なのですけれども、彼女は、夜勤の時に、聖書のみことばを何回も私の所に持って

きました。そして、決定打となったのは、『実を結ぶ命』(ゴットホルド・ベック宣教師著、若くして召された娘のリンデさんの闘病と信仰について書かれた)です。この本には感動せざるを得ませんでした。

そして、入院中、自宅への外泊許可が下りた時、アルコール依存症の二年先輩になるSさんのお宅の家庭集會に案内されました。この時の主治医のM先生(現在も病気の相談にのってくださっています)が、どうして許可をしてくださったのか、未だにわかりません。Sさんのお宅に入って驚いたのは、集われた皆さんの目がキラキラと輝いていたことです。ドイツ人のベック宣教師(以後ベックさん)による三十分の映画、一時間弱のメッセージについては何も覚えていません。しかし、全然、この世と違うものを感じました。そして、私はその晩、自宅に久しぶりに帰って決心しました。「イエス・キリストを救い主として信じよう」と。玲子も従ってくれました。

しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとつても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

(1ヨハネ2:8)

私が求めていた「真理」が、ここにあったわけです。しかも、イエス・キリストは「光」「愛」そのものであります。私は、罪というのは、よくわかりませんでしたが、次のことを認めざるを得ませんでした。つまり、一つ、エリートコースを歩んで来た結果、私が非常に傲慢であること、二つ、いつも自分中心であり、わがままであること。

劇的なイエス様との出会いでした。

気がついたら、私は「薬物依存症」から「イエス・キリスト依存」になっていました。特に、価値観は百八十度、主によって変えられました。そして、心に傷を与えた、

母親と、妻と、二人の息子に、正座して謝りました。

それからは、病院の土日の外泊の時に、吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。ベック宣教師から、「洗礼を受けたらいかがですか」と提案され、三十数人の方と一緒に夫婦で洗礼を受けました。

私は五か月間入院し退院後は吉祥寺キリスト集会の日曜礼拝、火曜日の学び会(当時、婦人会)、木曜日の祈り会、全部出席しました。そして、空いている夜は、都内で行なわれているNAミーティングに熱心に通いました。「NA」とは「ナルコティクス・アノニマス(匿名の薬物依存者たち)」の略で、薬物依存症の者が自主的に集まる、組織のない自助グループです。そこで、私は病気が重いので、「重二郎(じゅうじろう)」というニックネームで通いましたけれども、非常に劣等生でありました。

やがて、退院して三年後に、吉祥寺キリスト集会で当時行なわれていた「AA」(アルコホーリクス・アノニマ

ス)のミーティングが開かれるようになりました。(アルコール依存症については、『光よあれ(第2集)』でSさんが書かれています)。

神様の導き —— 突然の大学赴任 ——

さて、主のご計画で驚いたのは、突然、私が静岡理工科大学に転任になったことでした。私の薬物依存症は、アルコール依存症に比べて回復が十倍以上遅く、研究のねじ研削盤では成功したけれども、その次のテーマが見つからず、大いに苦勞しました。私は、「これでは、東京工業大学をクビになる」と思っていました。ちなみに東京工業大学は猛烈な大学で、例えば、研究については、一年間に十通の研究論文や著書を出さないと一人前には扱われない大学でした。

そんなある時、突然、研究所の所長が私の部屋に來られて、「大塚二郎さんは、新設の私立静岡理工科大学に行きなさい」と異動が命ぜられました。「静岡理工科大

学機械工学科で精密加工、超精密加工を担当せよ」ということです。私は素直に応じました。赴任先は静岡県袋井市で、妻の実家の近くでした。そして、隣の掛川市に自宅を建てる事になったわけです。

これは、まさに神様の導きです。というのは、所長にどこからどうやってその話が持ち込まれたのか、全く未だもってわからないからです。

神様の命令によって移った静岡理工科大学では、専門ではない科目の講義も持たざるを得ず、多忙を極めました。しかし、私は、「神様の命令で移った大学」でしたので、それほど苦にはなりませんでした。全くの新設の大学で、文部科学省は過剰に干渉し、命令をしてきました。その中で、教育、研究の他、とくに大変だったのは就職です。新設の大学なので、会社からの就職の情報は無く、私は第一回卒業生を就職させるにあたって、会社を一つ一つ回りました。そうしたことを毎年繰り返し続けた結果、それらの会社から、産官学の共同研究を希望す

るところが出てきて、文科省の科学研究補助金を毎年いただけるようになりました。数年後には、経済産業省から共同研究費が出るようになり、実用化され、これまでも多くの製品に使われています。まさに全てが神様からの贈り物でした。

試練 —— 成長の源 ——

そして、あなたがたに向かつて子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と違って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。…肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さ

にあずからせようとして、懲らしめるのです。

(ヘブル 12・5〜7、10)

試練によって、私たち夫婦は何度も苦しみ、患難を通りました。ここに、「主はその愛する者を懲らしめ」と書いてあります。私たち夫婦は、ほんとうにイエス様に愛され、「主よ、もう主の懲らしめは十分です。勘弁してください」と祈っても、百二十パーセント懲らしめられました。それと同時に、聖霊によって大いに喜ぶことも教えられました。それは、理屈では考えられないことです。

苦しみ、懲らしめによって、私は、「救いの確信」というものを得ることができました。「聖書に書いてあるから信じます。聖書に書いてあるから、従います」これが「救いの確信」です。

試練をいくつも与えられましたが、そのうちの二つの例を述べます。

私の母親は、素直に軽井沢の修養会(バイブルキャ

ンプ)でベック宣教師と交わってすぐにイエス様を信じ、救われました。ほんとうに素直な母親でした。そして、八十八歳の時に神様から目に緑内障が与えられ、両眼が見えなくなりました。家族皆で母を助けました。彼女は九十八歳でひっそりと息を引き取って、先に天国に行きました。

次に、妻の病気の試練です。妻は六十歳頃から手が震えるようになり、本人も辛かったようなので、県内の病院をあちこち訪ねた結果、一年間かかつて、やっとパーキンソン病だとわかりました。そして症状が進み、歩くことも大変になってきた上に、薬の副作用でレビー小体型認知症になってしまいました。それで、私と息子は妻を介護することを主からのプレゼントとして受け取りました。玲子は、その後、介護ホームに入りました。私は、毎日通い、一緒に聖書を読み、『日々の歌』を歌い、祈っていました。そうしているうちに、妻は肺がんを併発し、七十二歳の苦しい一生を終えて天国に

行きました。

その時から、私は半人前になってしまいました。今、考えてみると、私の妻にしては、ほんとうに出来すぎた妻で、心穏やかで、着飾らず、天性の明るさが、信仰によりますます明るくなり、よく働く人でありました。私の妻としては、もったいない人でした。

イエス様と永遠の住まい

ありがたいことに、私たちイエス様を信じ、救われた者は、神様の「いのちの書」に名がしるされておりますので、携挙と再臨に近い今の時、復活のイエス様にお会いすることが待ち遠しいです。

私たちは「地上では旅人であり寄留者」(ヘブル 11・13)とあります。本格的な人生が、主と出会ってから始まるのです。二千年前にイエス様が、この地上においてになった時は、私たちを「救う」ために来られたのですけれども、今度、来られる時には、この地上を「さばく」た

めに来られます。何がさばかれるかというと、まず、にせ預言者です。それから偶像礼拝をしている宗教です。共産主義、最近の科学、とくに AI (Artificial Intelligence、人工知能)の一部は神様のさばきを受けることになると思います。

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

(黙示録 22・1〜5)

7人の証し

Unser Herr lebt

私たちは、もうすぐ天国に行き、そこに永遠に住みます。そこはエデンの園に似ていますが、蛇はいません。悪魔もいません、つまり、罪が全く存在しない所です。ヨハネが天国の様子を幻で見て黙示録に書いていますけれども、ヨハネ自身も、これを紙と筆で表わすことはできません。それほど、素晴らしい所に行けるわけですから永遠の幸福が約束されています。

イエス様は、聖書の黙示録の最後で三回もこう言っておられます。

わたしはすぐに来る。 (黙示録 22・7、12、20)

大塚二郎（おおつかじろう）

一九四〇年 東京都武蔵野市生まれ

東京都立西高等学校卒業、東京工業大学理工学部制御工学科卒業、同大学院理工学研究科博士課程（機械工学専攻）修了、工学博士、同大学精密工学研究所助手・助教授、静岡理工科大学理工学部機械工学科教授、精密工学会超精密位置決め専門委員会委員長、静岡理工科大学名誉教授

文部科学大臣賞他二十一件受賞

著書『ナノテクノロジーと超精密位置決め技術』他

三冊

静岡県在住

妻 玲子（れいこ） 二〇二〇年三月召天

長男 哲史（てつし）、次男 英二（えいじ）



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

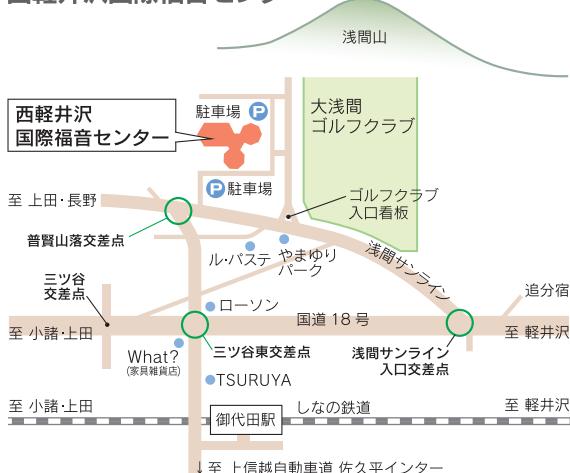
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターははじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのことーヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれー私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第66号

定価100円（税込み）2025年8月1日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力 芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
写真	鈴木力 芳我幸雄
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。

本証し集でよく使われる言葉は以下のような意味です。

「兄弟姉妹」

イエス・キリストを救い主と信じる者は神の家族であり、尊敬と親しみを込めて、男性には「兄弟」、女性には「姉妹」と付けて、互いに呼びかわしております。

「神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」（マルコ3・35）

「交わり」

イエス・キリストを救い主と信じる者たちが、聖書のみことばを土台に、ささえ合い、励まし合うことを言います。

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」（1ヨハネ1・3）